HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大構内の遺跡 6 昭和60-61年度
Issue Date	1988-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62675
Type	other
File Information	HokkaidoUniversityCampusSites06_S60-61.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP



北大構内の遺跡

昭和60-61年度

6

1988

北大構内の遺跡

昭和60-61年度

[6]

序

北海道大学の構内には多数の古代遺跡が埋れており，しばしば工事に先立つ発掘調査でそれが見つかる。この話を聞いて，私は新鮮な驚きを感じた。私が歩んだ道とは全く異なった世界が，突然目の前に現われたような気がしたからである。埋蔵文化財調査室の関係者によると学内の地下にはまだまだ未知の資料が眠っており，寮の敷地を掘った時など西暦9世紀代の大量の炭化した雑穀類が出土，本道の農耕の開始についての貴重な手掛かりが得られたという。また，一昨年実施された教養部前の体育館建設工事では，現場地下から4世紀頃と考えられるキャンプ跡が発掘され，季節的に移動する古代人の生活の一端を垣間見ることが可能になったそうである。今回出版されるのは，この遺跡の調査記録を中心としたものである。伝統ある北海道大学のキャンパスからも，こうして次々と重要な考古学資料があらわれ，それらを組み合わせることによって人類社会の新しい座標軸が作られていく。ある意味では，教育研究の本質にもかかわる仕事として，また歴史のデータ・ベース作成の基本作業として，今後とも期待していきたいと思う。

1988年3月

北海道大学学長　伴　義雄

目次

序 ——— 3
例言 ——— 6
Summary ——— 8

第Ⅰ章　昭和60年度の事業報告 ——— 11
Ⅰ—1　調査及び保存事業の実施 ——— 11
Ⅰ—2　言語文化部建設予定地の調査 ——— 11
Ⅰ—3　遺伝子実験施設建設予定地の調査 ——— 12
Ⅰ—4　農学部付属植物園事務所建設予定地の調査 ——— 15

第Ⅱ章　昭和61年度の事業報告 ——— 19
Ⅱ—1　調査及び保存事業の実施 ——— 19
Ⅱ—2　工学部核磁気共鳴装置研究棟建設予定地の調査 ——— 19
Ⅱ—3　学生部体育館建設予定地の調査 ——— 24

第Ⅲ章　野営地の再構成——考古学資料を用いた人間行動の復元 ——— 49
付篇　北大構内遺跡出土の植物遺存体関連資料 ——— 55

《図目次》

第1図　北大構内図 ——— 7
第2図　発掘調査地点と周辺の図 ——— 12
第3図　出土土器 ——— 12
第4図　発掘区の位置と遺構の図 ——— 13
第5図　発掘状況と遺構 ——— 14
第6図　発掘区と周辺の図 ——— 15
第7図　発掘区と遺物出土区域の図 ——— 16
第8図　発掘状況と出土遺物 ——— 17
第9図　発掘調査地点と周辺の図 ——— 20
第10図　遺跡の景観と発掘状況 ——— 21
第11図　ピットと土器出土状況 ——— 22
第12図　出土遺物 ——— 23
第13図　発掘区と周辺の図 ——— 24
第14図　発掘区と焼土の分布図 ——— 25
第15図　焼土の図 ——— 25
第16図　出土土器写真 ——— 27
第17図　出土土器の図 ——— 28
第18図　出土土器細部写真 ——— 30
第19図　深鉢の意匠 ——— 33
第20図　注口つき鉢（a）・深鉢（b）の意匠 ——— 35
第21図　出土石器 ——— 37
第22図　出土石器 ——— 37
第23図　土器破片の“ブロック” ——— 39
第24図　土器破片の分布 ——— 40
第25図　剝片石器，剝片・砕片の分布 ——— 41
第26図　石斧と礫の分布 ——— 42
第27図　発掘状況 ——— 44

第28図　地層状況，焼土遺構 ―― 45
第29図　遺構の発掘や遺物の取り上げ ―― 46
第30図　出土炭化種子と現生種子の走査電顕像 ―― 57
第31図　出土炭化穂軸と現生コムギ穂軸の走査電顕像 ―― 58
第32図　現生アワ・ヒエ・キビ・コムギの灰像と出土炭化物資料の走査電顕像 ―― 59
第33図　現生アワ（*Setaria italica*）の走査電顕像 ―― 60
第34図　現生ヒエ（*Echinochloa utilis*）の走査電顕像 ―― 61
第35図　現生キビ（*Panicum miliaceum*）の走査電顕像 ―― 62
第36図　現生キンエノコロ（*Setaria glauca*）エノコログサ（*Setaria viridis*）の走査電顕像 ―― 63

《表目次》

第1表　出土遺物一覧表 ―― 25
第2表　土器の法量 ―― 26
第3表　礫器の計測表 ―― 36
第4表　礫の属性表 ―― 36
第5表　クルミの出土箇所と数量 ―― 38
第6表　焼土や“ブロック”の土器 ―― 38

例言

1　本書は，昭和60年度と昭和61年度に北海道大学埋蔵文化財調査室が北海道大学構内で実施した発掘調査等の報告書である．

2　本書の執筆は，北海道大学埋蔵文化財調査プロジェクト・チームの所見に従い，報文末尾に氏名を記した者が行った．

3　本書の図の浄書や写真撮影等は，報文の分担者が中心となって行った．

4　北海道大学埋蔵文化財調査プロジェクト・チームおよび埋蔵文化財調査室のメンバーは，つぎの通りである．

吉崎昌一（調査プロジェクト・チーム責任者），岡田宏明，岡田淳子，林謙作，菊池俊彦，横山英介（発掘調査担当者），椿坂恭代

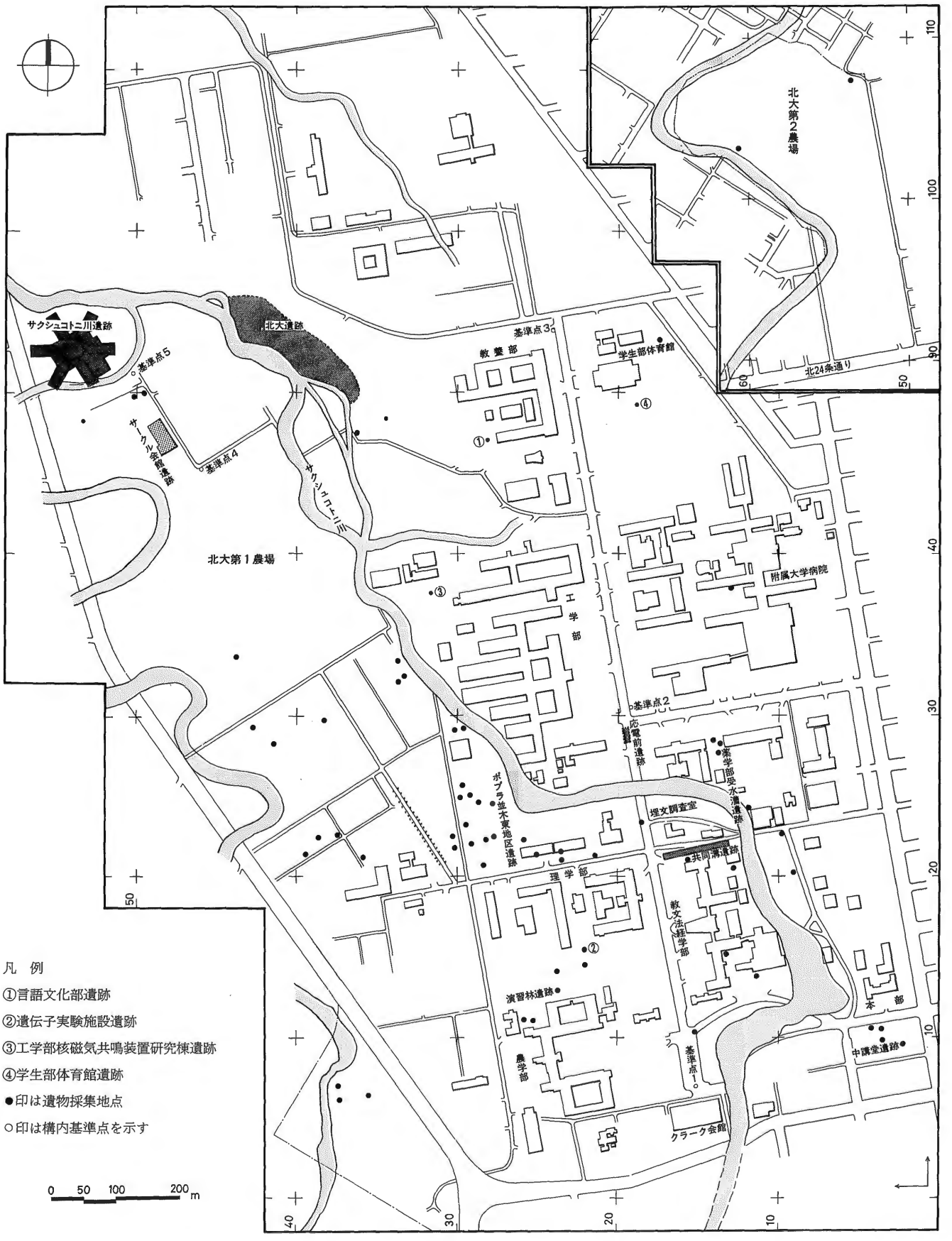
5　発掘調査および整理作業参加者（参加名薄順）

昭和60年度―平川泰彦，三崎かおる，輪倉一広，山下景司，高橋立史，山本一郎，捧敏夫，平山恵子，荒木ミヤ子，酒井洋子，尾崎操，越湖梅子，桑島房子，大瀬貞子，帰山千代子，千葉洋子，小野精子，大西美智子，江丸悦子

昭和61年度―三崎かおる，高橋立史，山本一郎，平山恵子，越湖梅子，桑島房子，大瀬貞子，帰山千代子，千葉洋子，中沢一哉，江丸悦子，西浦恵美子，佐々木美恵子，細井紘子，乳井聖子，石川洋子，遠藤和子，渡辺くに子，最上洋子，豊嶋裕子，熊谷紀子，赤坂京子，北山友子

6　発掘された資料は，北海道大学内の埋蔵文化財調査室に展示・保管されている．

第１図　北大構内図


北大第２農場
北24条通り
サクシュコトニ川遺跡
北大遺跡
基準点3
教養部
学生部体育館
④
①
基準点5
サークル会館遺跡
基準点4
サクシュコトニ川
北大第１農場
③
工学部
附属大学病院
基準点2
応電前遺跡
ポプラ並木裏地区遺跡
農学部受水槽遺跡
埋文調査室
共同溝遺跡
理学部
②
教文法経学部
演習林遺跡
農学部
本部
中講堂遺跡
基準点1
クラーク会館
凡　例
①言語文化部遺跡
②遺伝子実験施設遺跡
③工学部核磁気共鳴装置研究棟遺跡
④学生部体育館遺跡
●印は遺物採集地点
○印は構内基準点を示す
0　50　100　200 m

Summary

1. Co-ordination of the Construction Projects and the Prehistoric Sites.

In order to preclude careless destruction of a prehistoric site, following two sorts of measures are employed. SCRUTINY is applied to the less extensive projects like piping or cabling. A Scrutineer is sent to the site of construction, and the project is to be continued unless any feature or quantity of artifacts are mentioned. TEST is applied to a project to construct a building or any other facility which occupies a considerable space. Surface soil of the perspective site is, either partially or totally, removed to examine presence /absence of some feature and/or artifacts. EXCAVATION is ensued when a feature or a quantity of artifacts are mentioned on the process.

2. Achievements in 1985.

Scrutiny has been applied to a single piping site without encountering either an artifact or a feature. Test have been applied to two sites. The both sites are proved to have been heavily disturbed to yield a meagre amount of artifacts. Excavation have been applied to three perspective sites: namely Department of Language Education, Central Office of Botanical Garden, and Hereditary Gene Experiment Center.

Small amounts of potsherds and flakes of obsidian have been recovered *in situ* at the former two, but no feature has been mentioned. An oblong earthwork (3 × 2 m and 12~20cm in depth), and a pit (70cm in diameter, and 23cm in depth) has been recovered at Heridetary Gene Experiment Center. All these artifacts are ascribed to Satsumon Period, and the age of the features can be dated to the same age as well.

3. Achievements in 1986.

Scrutiny has been applied at 12 sites (6 piping/cabling, 2 transplanting *etc.*). No artifact/feature has been encountered. Excavations have been applied to two perspective sites: namely Magnetic Resonance Research Center (MRRC) and Athletic Gymnasium.

At MRRC site, 5 heaps of ash have been mentioned. Dimensions of these heaps range 30~40 cm on the longer axis, and 20 to 30cm on the shorter.

One of the heaps overlies a pit which is of 40cm long, 20cm wide, and 50 cm deep. Infill of the

pit contained sherds of a Satsumon Pottery, and numerous charred bone fragments.

Eight renounced hearths have been exposed at the site of Athletic Gymnasium. They are aggregated in so narrow an area, that five out of eight are confiscated within an area of 4.6m by 2.7m. They are either circular or oval in shape, with a range of size from 60 to 70cm long, 40 to 60cm wide respectively. The cobbles applied to enclose the hearths are scarcely left intact. Majority of them are removed to be scattered around the site (Fig.15). Infill of the hearths, 2～4cm thick, contain fragmented hammer stones, flakes, and both floral and faunal remains which are severely charred and fragmented.

Amount of the artifacts is very small: 6 pottery vessels (Figs.16・17), 5 polished adzes (Fig. 21), 11 scrapers (Fig.22), and 7 hammer-stones (Fig.22), not to say of a chunk of flakes (mainly obsidian). Despite of meagre amount of the artifacts, it can be conceived that they are intermittently accumulated on the site.

Distribution of the conjointed cobbles, applied to enclose the hearths, is clustered into three seperate areas as to suggest seperate abolishment (Fig.26). Stylistic variation of the vessels seem to fit with provenance of the cobbles. Although all the vessels are ascribed to the latter half of Kohoku C_2, in Epi-jomon Period, vessels No.5・6 are segregated from No.4, on the manner of punctuation and/or incision. It should be mentioned that the vessel No.4, together with No.2, is less decorative to indicate a slightly younger age.

These observations indicate that the site reflect a series of intermittent activities of a small number of people. On a basis of stylistic variation revealed on vessels, it is possible to infer at least two intervals. Identification and analysis of and faunal remains are expected to specify the nature and mode of the activities. However, it is possible to speculate, on a basis of topographic nature of the site. It is quite that the greater tract of the activities is related with exploitation of aquatic resourcey. (Kensaku HAYASHI)

第Ⅰ章　昭和60年度の事業報告

Ⅰ－1　調査及び保存事業の実施

(1)　昭和60年度に本調査を行った地区は，以下に記す3箇所であり，詳細はⅠ-2・3・4に示す通りである．

1　言語文化部建設予定地

2　遺伝子実験施設建設予定地

3　農学部付属植物園事務所建設予定地

(2)　昭和60年度に予備調査を行った地区は，以下に記す3箇所である．

4　農学部付属演習林研究棟

▲予備調査期日／5月24日～5月27日

▲面積／120㎡

▲方法・所見／中央部の旧建物基礎部分を除く東西21m，南北6mについて調査した．その結果，大部分が攪乱されており，黒曜石製剝片が2点出土しただけであった．

5　情報処理教育センター

▲予備調査期日／6月28日～7月13日

▲面積／180㎡

▲方法・所見／東西に3本，南北に2本試掘溝を設定して調査した．その結果，大部分が攪乱されており，擦文時代の土器の小片が2点出土しただけであった．

(3)　昭和60年度に工事中立会を行った地区は，以下に記す1箇所である．

①　学生部グランド水道管理設現場　8月3日

遺構・遺物は検出されなかった．

（横山　英介）

Ⅰ－2　言語文化部建設予定地の調査

1　調査の概要

前年度の予備調査で擦文時代の土器片などが発見されていたので，それをふまえて以下の要領で本調査を実施した．

遺跡所在地／札幌市北区北17条西7丁目（北海道大学札幌　43°N，141°20’E）

調査機関／北海道大学埋蔵文化財調査室

調査期間／昭和60年5月7日～5月24日

発掘調査面積／580㎡

調査担当者／横山英介

2　発掘区とその状況

発掘調査地点の位置は，教養部南西の平坦地（標高13.8m）である（第1図）．調査に際して，調査区のもっとも南東隅に原点（XY＝00－00）を置き，それを起点に4m×4mグリッドを設定した（第2図）．

地層は，上層より積み土（厚さ約60cm），ついで黒色土（厚さ20～30cm），褐色土となり，遺物は黒色土中に包含されていた．しかし，当地区は旧建物の基礎などによってすでに破壊が著しく，遺物包含層はほとんど残存していなかった。

3　遺構と遺物

当地区から遺構は発見されていない．

遺物は，土師器破片が56点と黒曜石製剝片が１点出土した．これらは，調査区のもっとも南側（00-02，01-01，01-02グリッド）で，ほぼ３ｍ×３ｍの範囲内に集中して出土した（第２図）．

4　まとめ

当地区は，擦文時代前期の遺跡であるが，旧建物の基礎などによってすでに破壊が著しく，その性格などは不明である．しかし，土器の出土状況などからみて，この周辺，とくに南東側に遺跡が広がっている可能性がある．

（横山　英介）

I—3　遺伝子実験施設建設予定地の調査

1　調査の概要

遺跡所在地／札幌市北区北11条西７丁目（北海道大学札幌　43° N，141°20’ E）

調査機関／北海道大学埋蔵文化財調査室

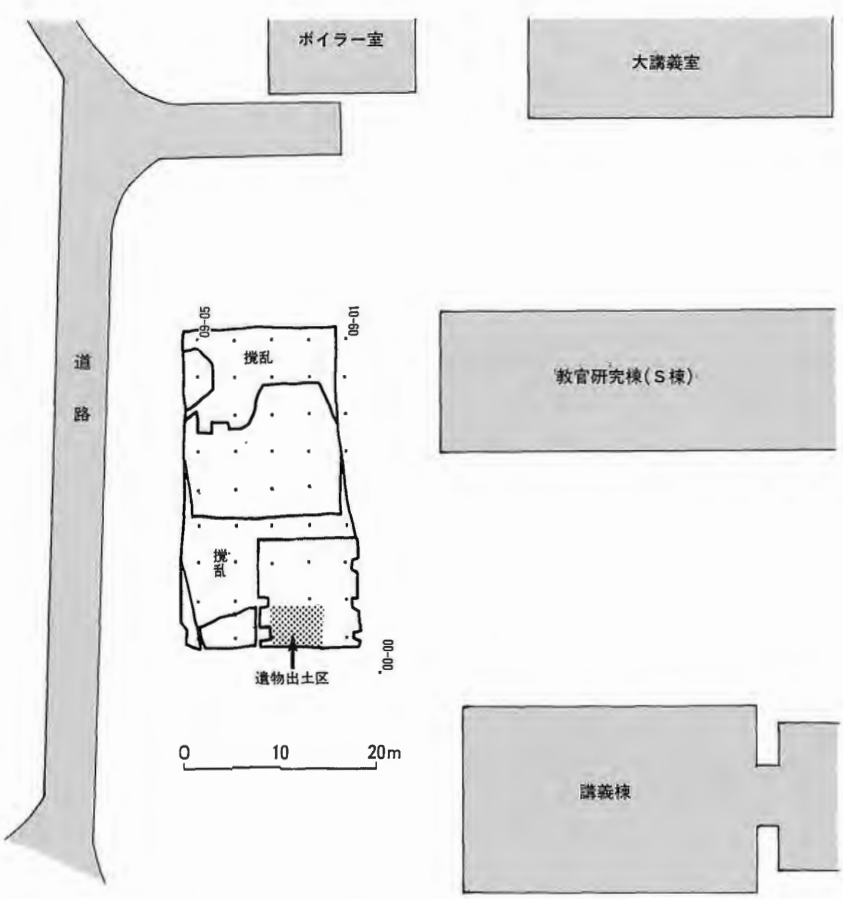
調査期間／昭和60年５月21日～６月28日

発掘調査面積／928m²

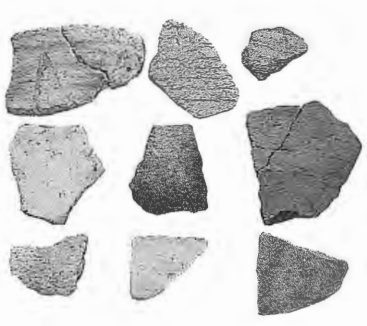
調査担当者／横山英介

2　発掘区とその状況

発掘調査地点の位置は，理学部南西の平坦地（標高14.3m）である（第１図）．調査に際して，調査区のもっとも南東隅に原点（XY＝00-00）を置き，それを起点に４ｍ×４ｍグリッドを設定した（第４図１）．



第２図　発掘調査地点と周辺の図



第３図　出土土器

地層は，上層より客土（厚さ約30cm），ついで黒色土（厚さ20～30cm），褐色土の順である．

3　遺構と遺物

(1)　遺構　発掘区の北西部分から遺構２基が発見された（第４図１）．

１号（03-09グリッド）は，長辺3.0m，短辺2.0m，深さ13～20cmの長方形の遺構である．柱穴やカマドなどの付設遺構はない．遺物は，埋め土から土器の小破片が２点出土，床面からの出土品はない（第４図２）．

２号（05-08グリッド）は，長径70cm，短径68cm，深さ23cmの不整円形の遺構である．遺物は，土壙の埋土から自然礫が１点出土した（第４図３）．

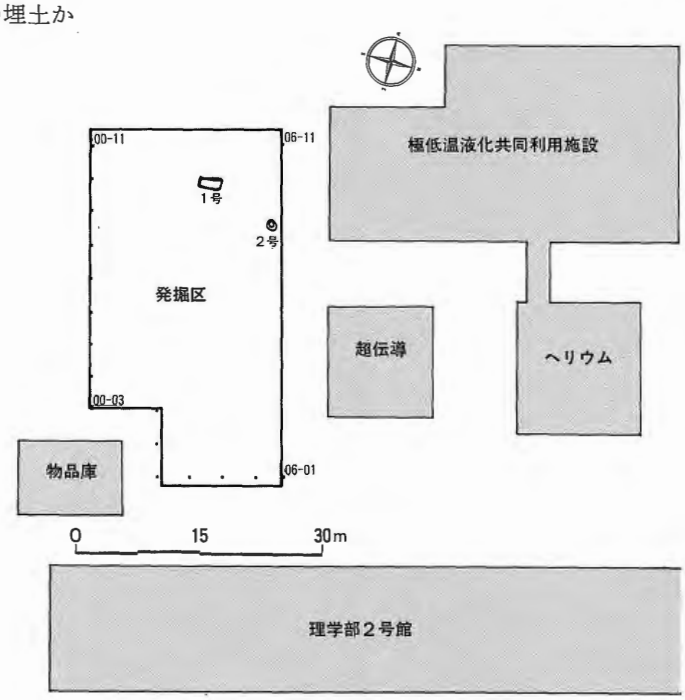
(2)　遺物　上記のもの以外出土していない．

4　まとめ

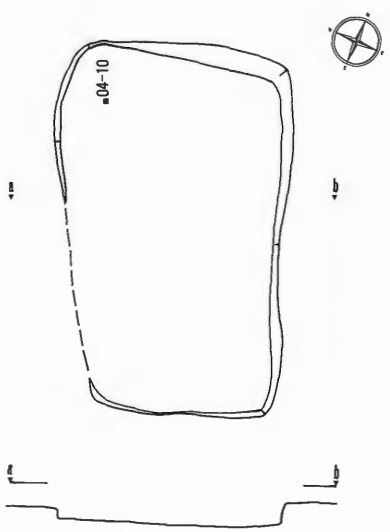
当地区の２つの遺構は，時期，性格などいずれも不明である．しかし，遺構が掘り込まれていた土層などからみて，それらが古代に作られたものであることは間違いないだろう．そうなれば，遺構の分布状況などからみて，調査区の西北側に遺跡が広がっている可能性がある．

（横山　英介）

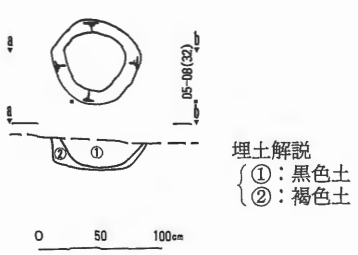
第４図　発掘区の位置と遺構の図



(1) 発掘区の位置と遺構分布図



(2) １号遺構



(3) ２号遺構

第５図　発掘状況と遺構



１　発掘風景（東から）



２　１号遺構（南から）



３　２号遺構（南から）

I—4　農学部付属植物園事務所建設予定地の調査

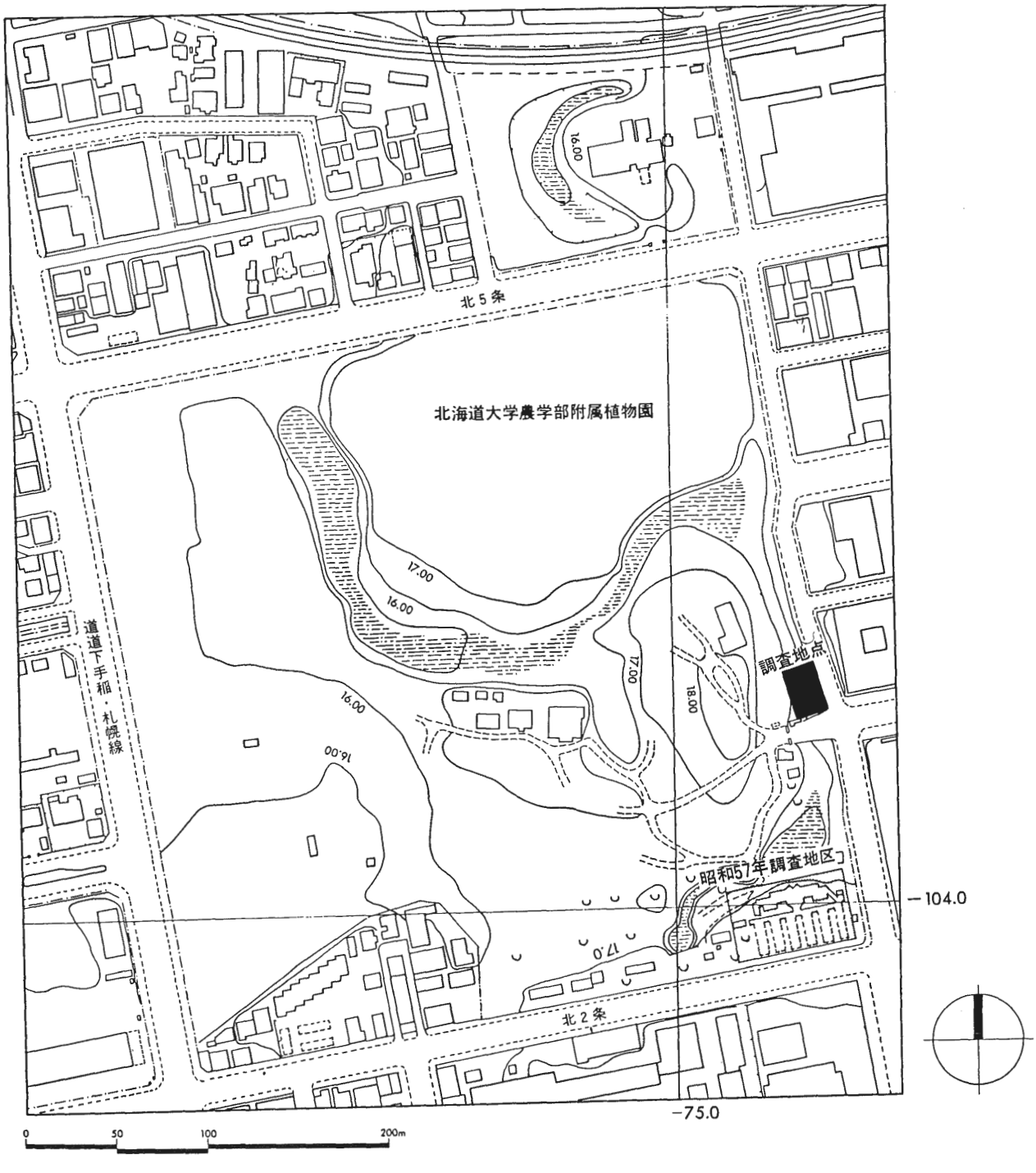
1　調査の概要

遺跡所在地／札幌市中央区北３条西８丁目
調査機関／北海道大学埋蔵文化財調査室
調査期間／昭和60年10月３日～10月24日
発掘調査面積／350㎡
調査担当者／横山英介

2　発掘区とその状況

発掘調査地点は，植物園正門の北側で，市道（西８丁目通り）に沿った草地（標高16ｍ代）にある（第６図）．調査に際し，調査区のもっとも東南隅に原点（XY＝00-

第６図　発掘区と周辺の図



00）を置き，それを起点に４ｍ×４ｍグリッドを設定した（第７図）．

地層は，上層より積み土（厚さ約20cm），ついで黒色土（約20cm），褐色粘土と続く．古代の遺物は，黒色土中に包含されていた．

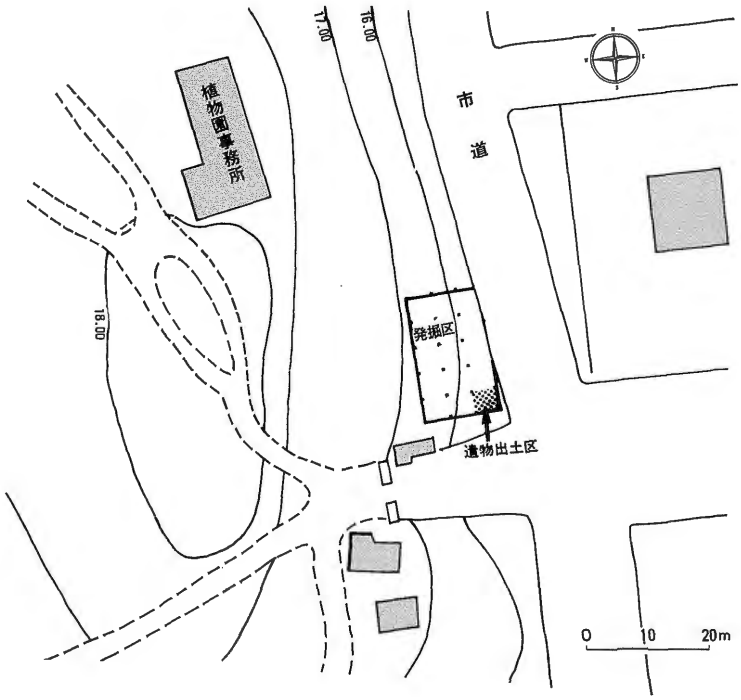
3　遺構と遺物

当地区から遺構は発見されていない．遺物は，調査区の南東側（00-00，01-00グリッド）に集中して発見された（第７図）．遺物包含層は，黒色土である．

遺物の種類と数量は，擦文土器の破片が19点と黒曜石製剝片・砕片が45点である（第８図）．その他，積み土や攪乱層から擦文土器の破片が31点回収された．

4　まとめ

当地区は，擦文時代中期の遺跡であるが，遺構などは検出されなかった．発見された擦文土器などの出土状況からみて，遺跡の主体部は既設の市道の部分を含みさらに東側へ広がっていると推定される．　（横山英介）



第７図　発掘区と遺物出土区域の図

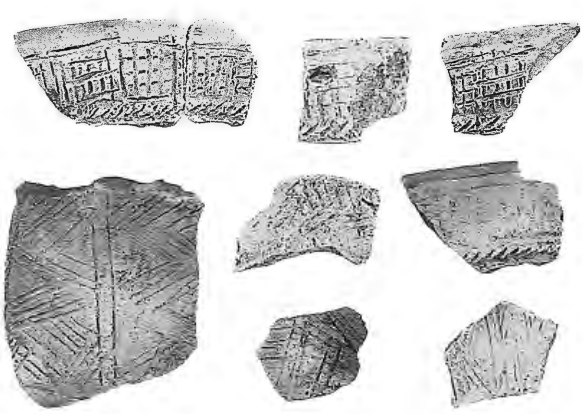
第８図　発掘状況と出土遺物



1　発掘調査状況（南東から）







2　出土土器

第II章　昭和61年度の事業報告

II—1　調査及び保存事業の実施

(1)　昭和61年度に本調査を行った地区は，以下に記す2箇所であり，詳細はII-2・3に示す通りである．

1　工学部核滋気共鳴装置研究棟建設予定地

2　学生部体育館建設予定地

(2)　昭和61年度に工事中立会を行った地区は，以下に記す12箇所である．

① 学生部テニスコート水道管埋設
工事現場——4月7日

② 国際交流会館東側オンコ移植現場——4月30日

③ 医学部付属図書館前電気ケーブル埋設工事現場——7月23日

④ 埋蔵文化財調査室前電気ケーブル埋設工事現場——7月28日

⑤ 応用電気研究所自転車置場工事現場——8月11日

⑥ 教養部書類保管庫増設工事現場——8月12日

⑦ 工学部核滋気共鳴装置研究棟電気ケーブル埋設工事現場——9月6日

⑧ 学生部体育館電気ケーブル埋設工場現場——9月24日，10月2日

⑨ 環境科学研究所前記念碑建立現場——10月27日

⑩ 工学部共同溝掘削現場——10月28日

⑪ 医学部付属図書館前オンコ移植現場——11月20日

⑫ 医学部付属福利厚生施設移転現場——11月25日

以上の工事現場は，舗装材や置土，あるいは旧建物の基礎工事などですでに破壊が著しい．また，地層の保存状態が比較的良好でも，遺構・遺物などは発見されなかった．　（横山　英介）

II—2　工学部核磁気共鳴装置研究棟建設予定地の調査

1　調査の概要

遺跡所在地／札幌市北区北13条西7丁目（北海道大学札幌43° N，141°20’ E）

調査機関／北海道大学埋蔵文化財調査室

調査期間／昭和61年5月6日～5月31日

発掘調査面積／173m²

調査担当者／横山英介

2　発掘区とその状況

発掘調査地点の位置は，工学部西の平坦地（標高12.5m）である（第1図）．調査に際して，調査区のもっとも南東隅に原点（X Y＝00-00）を置き，それを起点に

4 m × 4 mグリッドを設定した（第9図）.

地層は，もっとも上が積み土（厚さ約100cm），以下黒色土（厚さ20～30cm），褐色土である.

3　遺構と遺物

(1)　遺構　焼土が5箇所で発見された（第9図）.

1号（02-01グリッド）は，長径30cm，短径25cm，厚さ1～2cmである．2号（03-01グリッド）は，長径40cm，短径30cm，厚さ1cmである．3号（03-01グリッド）は，長径40cm，短径20cm，厚さ1cmである．この焼土の下面には深さ約50cmのピットがみられ，擦文土器の破片（第11図3）や骨片などが出土した．4号（02-03グリッド）は，長径40cm，短径25cm，厚さ1cmである．第5号（02-03グリッド）は，長径35cm，短径25cm，厚さ1cmである.

(2)　遺物　遺物包含層は黒色土であり，つぎのようなものが出土した.

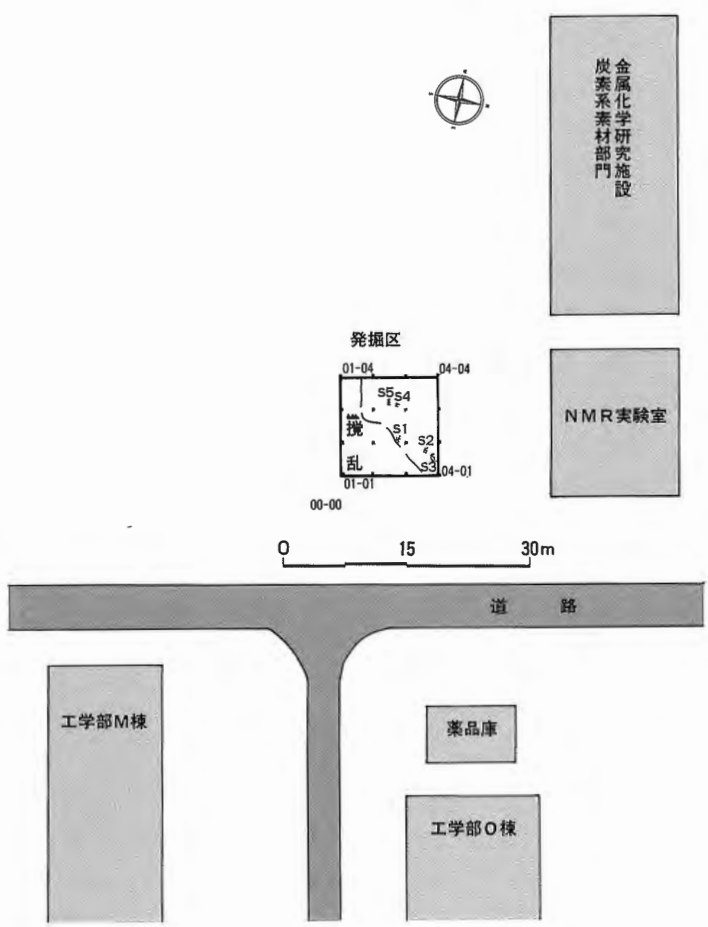
土師器1個体分，擦文土器1個体分，土器の破片159点，黒曜石製剝片・砕片42点である（第12図）.

これれの遺物の出土・分布状況は，焼土およびその周辺からのものが主体である.

4　まとめ

当地区の5箇所の焼土は，擦文時代中期に営まれたものである．出土した擦文土器の諸特徴を構内でかつて調査された遺跡のものと比較すると，サクシュコトニ川第1文化層の土器と非常によく似ている.

しかし，調査区が非常に狭小のため焼土個々の性格などを判断するには制約がある．いずれにせよ，この調査区の西北側に遺跡が広がっている可能性があるので，遺物個々の在り方などをもとにした遺跡の性格などは，今後その部分の調査が実施されるような機会があれば，それと合わせて活用しようと思う.　（横山英介）



第9図　発掘調査地点と周辺の図

第10図　遺跡の景観と発掘状況



1　中央・道路のつき当たりが発掘現場（南西からみる）



2　中央・盛土のかげが発掘現場（南からみる）



3　遺跡の北西方向にはサークル会館、サクシュコトニ川遺跡がある

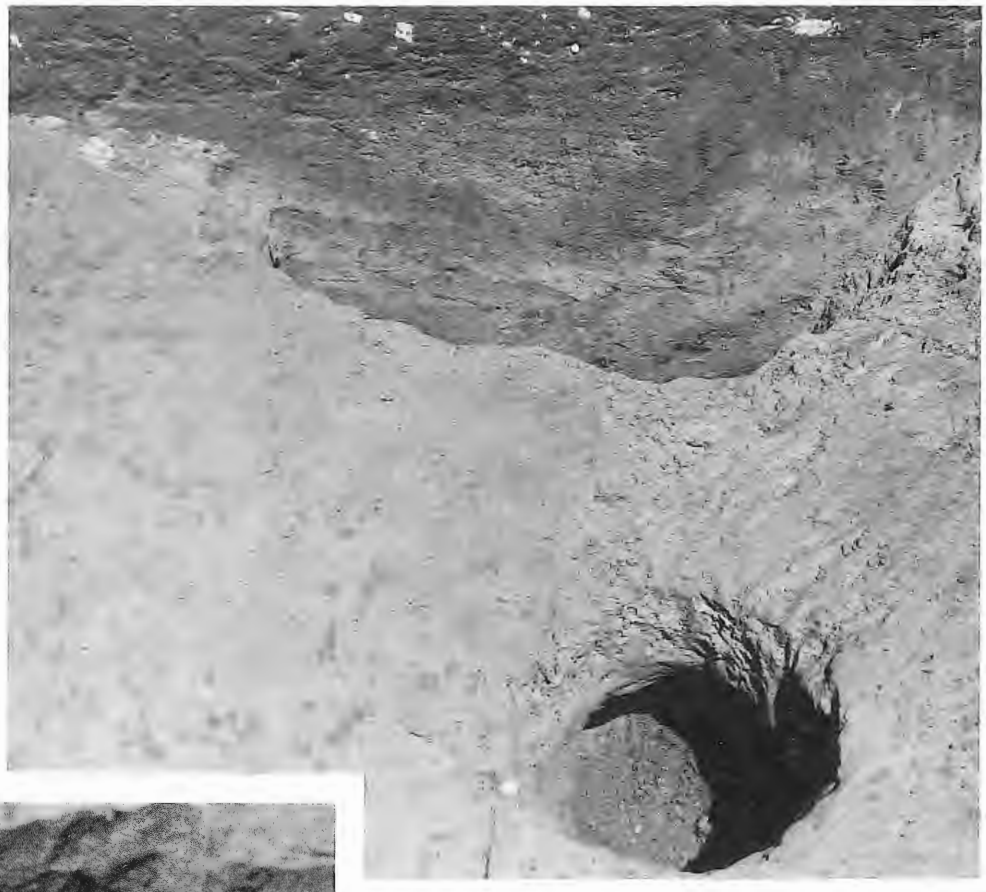


4　遺跡の南方向、ポプラ並木の向うには藻岩山がみえる

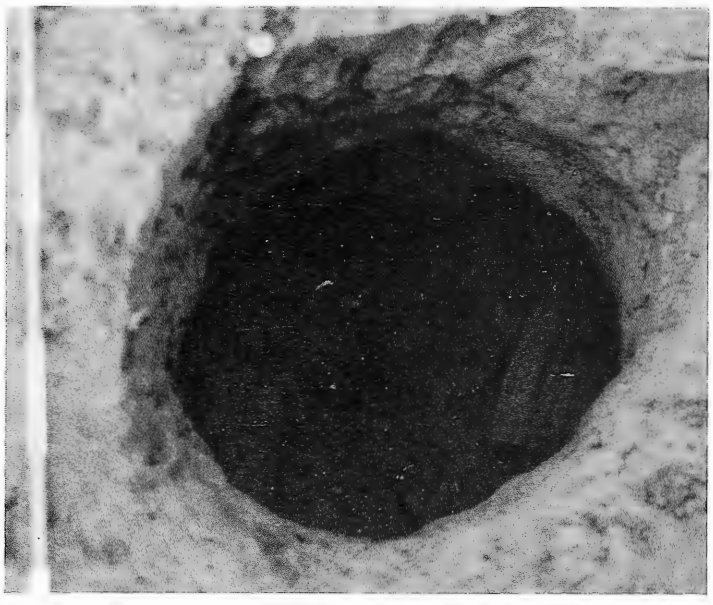


5　発掘状況、シートは分析用に採取した土壌（北西からみる）

第11図　ピットと土器出土状況



1　焼土３の下に掘られていたピット、手前のピットは底面が上のピットにつながつた

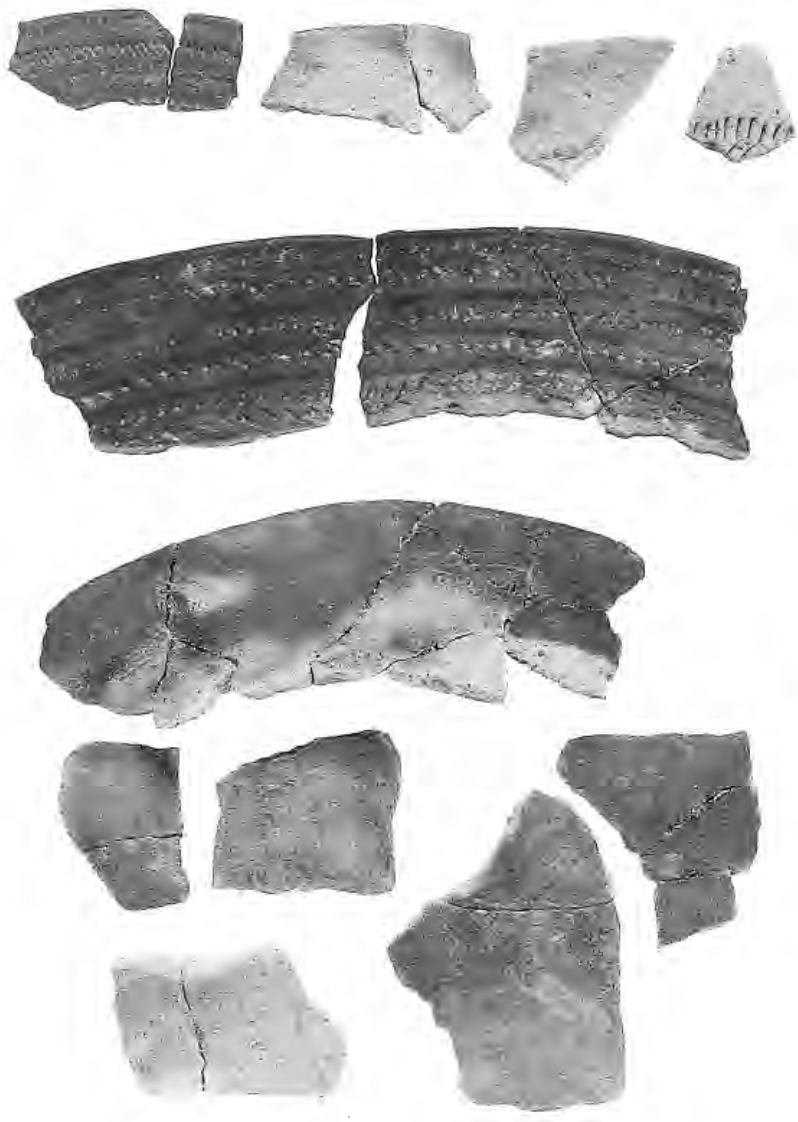


2　焼土３の下に円形ピットが掘られており、個体番号１の土器口縁部が出土した



3　個体番号２の出土状況

第12図　出土遺物



II–3　学生部体育館建設予定地の調査

1　調査の概要

遺跡所在地／札幌市北区北17条西５丁目（北海道大学札幌43° N，141°20’ E）
調査機関／北海道大学埋蔵文化財調査室
調査期間／昭和61年６月７日～６月30日
発掘調査面積／1600㎡
調査担当者／横山英介

2　発掘区とその状況

発掘調査地点の位置は，教養部東の平坦地（標高13.5m）である（第１図）．調査に際して，調査区のもっとも南東隅に原点（ＸＹ＝00-00）を設定，それを起点に４ｍ×４ｍグリッドを設定した（第13図，第14図）．

地層は，もっとも上が積み土（厚さ約70cm～100cm），以下黒色土（第Ⅲ層，厚さ20～30cm），褐色土（第Ⅳ層）である．

3　遺構と遺物

(1)　遺構

この遺跡からは大小４箇所の焼土が発見され，「焼土１」から「焼土４」までの番号が付された（第15図）．

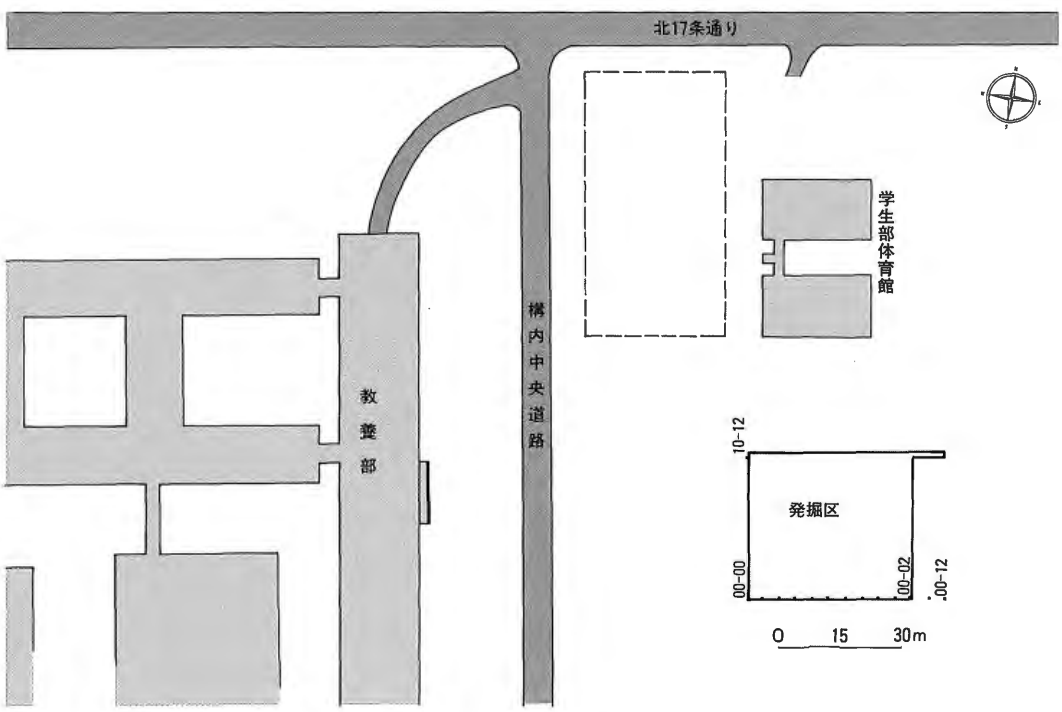
「焼土１」―01-04グリッドに位置する．長径4.6m，短径2.7mでほぼ南北に長く，不整形に炭化物が分布している．その中に強く焼けた部分が５箇所みられ，北側から順に記号が与えられた．

Ａ―長径１ｍ，短径0.9ｍのほぼ円形で，地山（第Ⅳ層）を４～５cm掘り窪めている．その南側の縁に添って割り石５箇が近接して並べられていた．この窪みには２～４cmの厚さで炭化物・骨片・石器の砕片などが堆積し（①層），さらに地山は４～５cmの深さまで焼けていた．

Ｂ―Ａの南側40cmの所にある．長径0.6ｍ，短径0.4ｍの不整形に炭化物・骨片・石器の砕片などが分布し，地山は約４cmの深さまで焼けていた．

Ｃ―Ｂの南側約40cmの所にある．長径0.3ｍ，短径0.2ｍの楕円形に炭化物・骨片・石器の砕片などが分布し（厚さ１～２cm），地山はほとんど焼けていない．

Ｄ―Ｃの南側30cmの所にある．長径0.7ｍ，短径0.7ｍの円形で，地山（第Ⅳ層）を５～６cm掘り窪めている．この窪みには炭化物・骨片・石器の砕片などが堆積し



第13図　発掘区と周辺の図

（①層），さらに地山は約２cmの深さまで焼けていた．

E－Dの南側でほぼ接している．長径0.9m，短径0.7mの不整形で，地山（第Ⅳ層）を４～５cm掘り窪めている．この窪みには炭化物・骨片・石器の破片などが堆積し（①層），さらに地山は約２cmの深さまで焼けていた．

なお，この５箇所の焼土のうち，直接新旧関係が判明したのはDとEだけで，DがEより古かった．

「焼土２」―00-04（30）と01-04（00）グリッドに位置する．長径１m，短径0.8mの不整形に炭化物・骨片・土器片・石器の砕片などが分布している（厚さ５～６cm）．

「焼土３」―02-04（10）グリッドに位置する．長径0.7m，短径0.6mの楕円形に炭化物・骨片・石器の砕片などが分布している（厚さ１cm）．

「焼土４」―02-04（21）グリッドに位置する．長径1.4m，短径0.6mの不整形に炭化物・骨片・土器片・石器の砕片などが分布している（厚さ１cm）．

（横山英介）

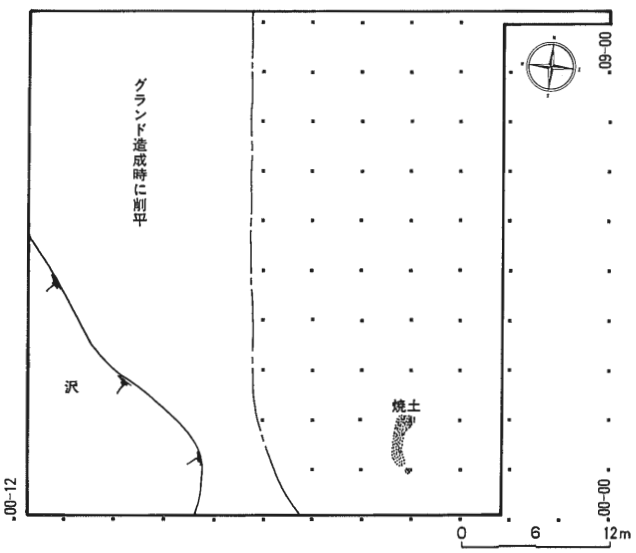
(2)　遺物

この遺跡からは続縄文期の土器や石器などが出土した（第１表）

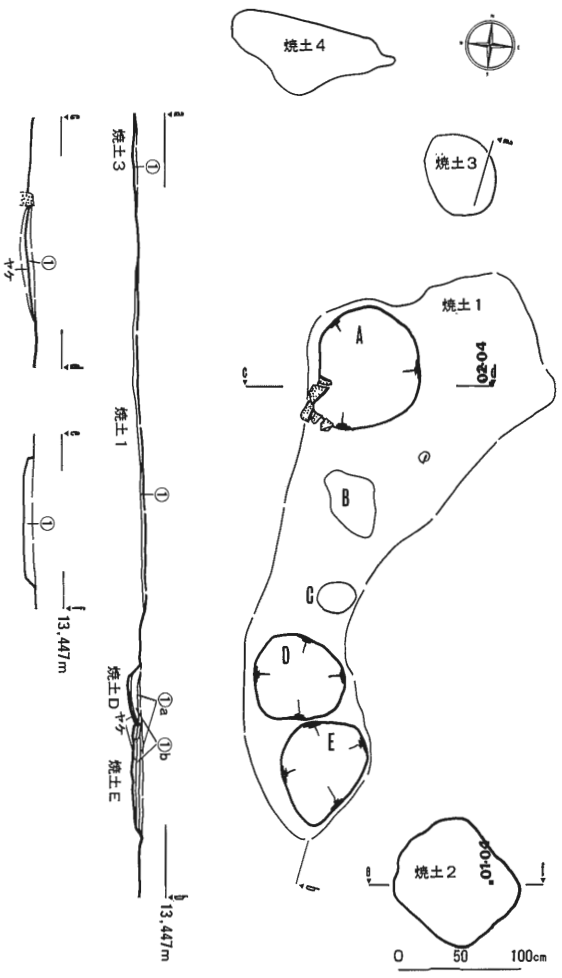
第１表　出土遺物一覧

続縄文土器	6
注口	3
深鉢	3
帰属不明破片	56
石　　器	25
剝片石器	11
礫器	14
剝片・砕片	620
礫	43
動物骨片	若干量
植物種子等	少量

註：これらの遺物は、第Ⅳ層上面から出土した。



第14図　発掘区と焼土の分布図



第15図　焼土の図

1　土器

〔器種・器形・法量〕　深鉢4個,鉢2個が出土した．深鉢は口径30cm前後，高さ40cm前後のもの（大形深鉢）が3点，口径，高さともに20cm以下のもの（小形深鉢）が1点ある．個体番号4（第16図1）がほぼ完全で，同5（同図2）はおなじ個体と思われる底部破片があるが接合できない．同6（同図3）は底部に接する粘土帯一本分ほどが欠けているのだろう．大形深鉢のうち，個体番号5・6は四山の波状突起をもち，個体番号4は平縁である．鉢（同図5・6）はいずれも小形で，小形深鉢（同図4）とおなじく，口縁は波状をなすものの，注口のうしろの大突起，それを折り返した位置の小突起が目立ち，その両脇の突起はまったく目立たない．個体番号1の注口の付け根には，横方向の孔があいており，2や3とはちがった形であることはたしかだが，正確な形はわからない．

出土した土器の法量を第2表にしめす。

第2表　土器の法量（単位 cm）

個体番号	全　高	現　高	最大径	口　径	底　径
1	8.9	—	—	10.6	6.6
2	11.2	—	13.7	16.5	6.6
3	15.0	—	18.5	14.9	6.8
4	35.7	—	27.8	同左	9.4
5	—	21.2	25.3	24.5	11.2
6	—	29.7	27.6	27.3	—

〔胎土・焼成・色調〕　胎土には径2㎜前後の礫をつなぎとして混ぜる。円礫が圧倒的に多い．かなり多量の亜角礫がまじる場合もあるが，新鮮な重鉱物の結晶そのものは見あたらない．風化した岩石ではなく，河川敷からあつめた砂利を利用したのだろう．亜角礫をふくむ個体（個体番号1・3・4など）のほうがつなぎの混入量が多い．

焼きは良く,とくに小形の鉢・深鉢は硬く締っている．個体番号5・6のように円礫をつなぎとしている中形深鉢は，やや焼きがあまいように見える．しかしこの2例は個体番号4よりも二次的な加熱による胎土の劣化がはなはだしいので，もともとはあまり目立ったちがいはなかったと考えたほうがよいだろう．

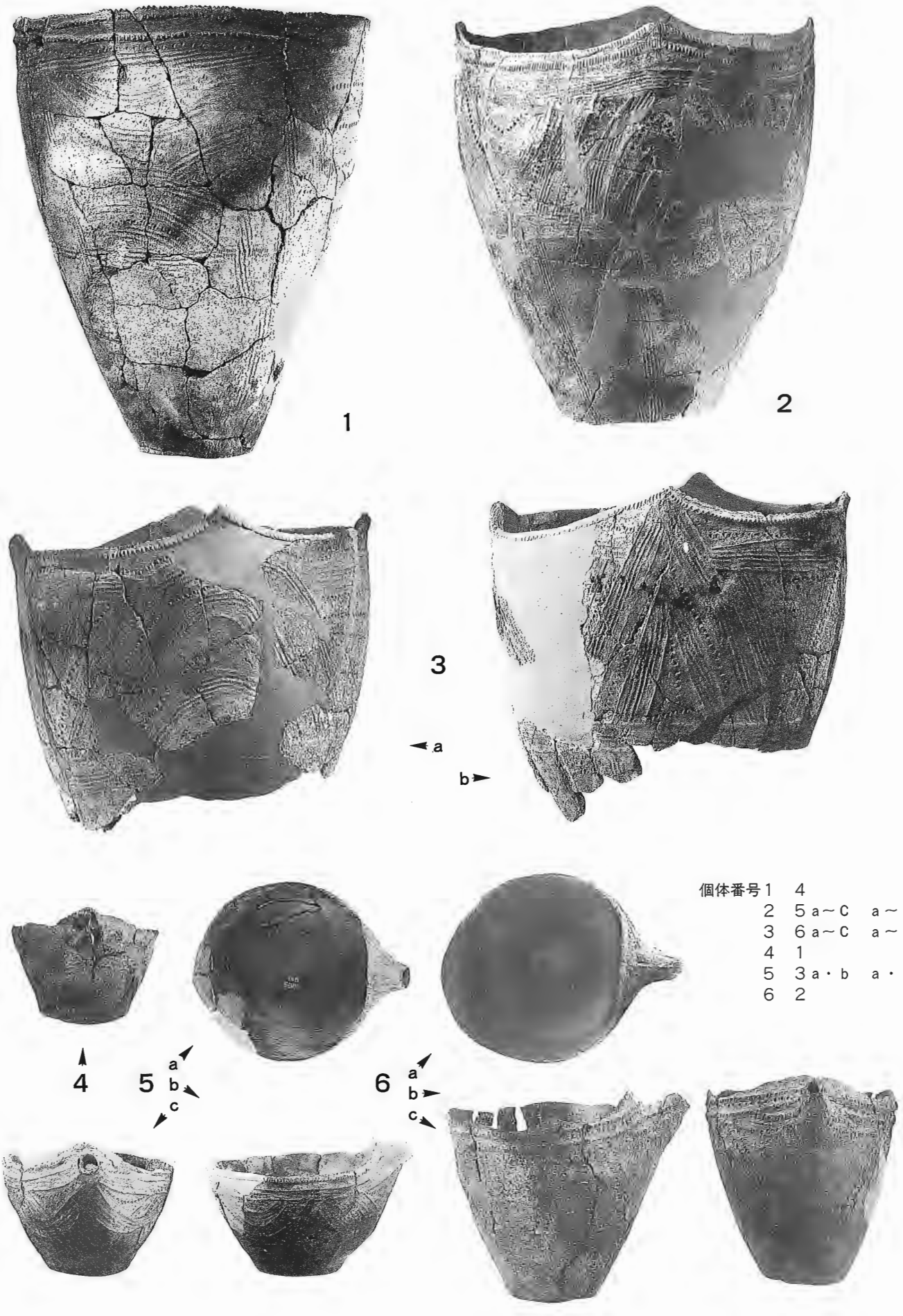
色調は白褐～淡褐色のもの（個体番号5・6），暗褐～黒褐色のもの（個体番号1・3）がある．ただし，部分的に色調がひどくちがっている例もある（個体番号2・4，第16図1・5）．個体番号4は胴部上半や口縁部に暗褐～黒褐色の部分が残っており，二次的に熱を強く受けた部分が，焼き上がるまでに吸いこんだ炭素質の成分を失ってあかるい色調になったのだろう．同2は一部の破片だけが焚き火のなかで熱を受けたのだろう．

〔成形・仕上げ〕　接合の途中での観察をおこたったため，粘土帯の積み上げかたは記録できなかった．底部のつくりはきわだった特徴があり，おおくの縄文土器や続縄文土器とはちがって，体部の下端に円盤状につくった底をはめこんでいる *．個体番号の1の口縁部内面には，注口のうしろの突起の部分に口縁と平行な粘土のひだが走っており，ひだの両端．突起の頂点とその真下を結ぶ菱形の割れ目が走っている（第18図1）．片口のような張りだしをつけた粘土板をはめこみ，その上にふたたび一部分を引き出した粘土板を積んで突起と注口を作ったことがわかる **．

内面はなで仕上げで，大形深鉢では幅3.5cm前後，小形深鉢では6㎜前後のあたりが横一斜に走っており，大形深鉢の場合には磨きに近く，かすかな光沢をしめている．小形のものにはそれほど強い例はなく，とくに個体番号1などは，胎土中の砂粒が移動した条線がはっきり残っている．なでの方向は口縁から全高の ⅓ほどの範囲では口縁にそいつけるように波状をなし，それより下

*　このような底部の作りかたは縄文晩期には見られず，恵山期になって姿をあらわすが，それほど目立たない．後北期にさかんになる技法とはいえるが，1㎞とへだたっておらず，時期もほぼ同じと考えられるK—135遺跡（上野・加藤1987）ではきわめて少数の例しか見られない．集団の異同をとらえる指標のひとつとなるかも知れない．

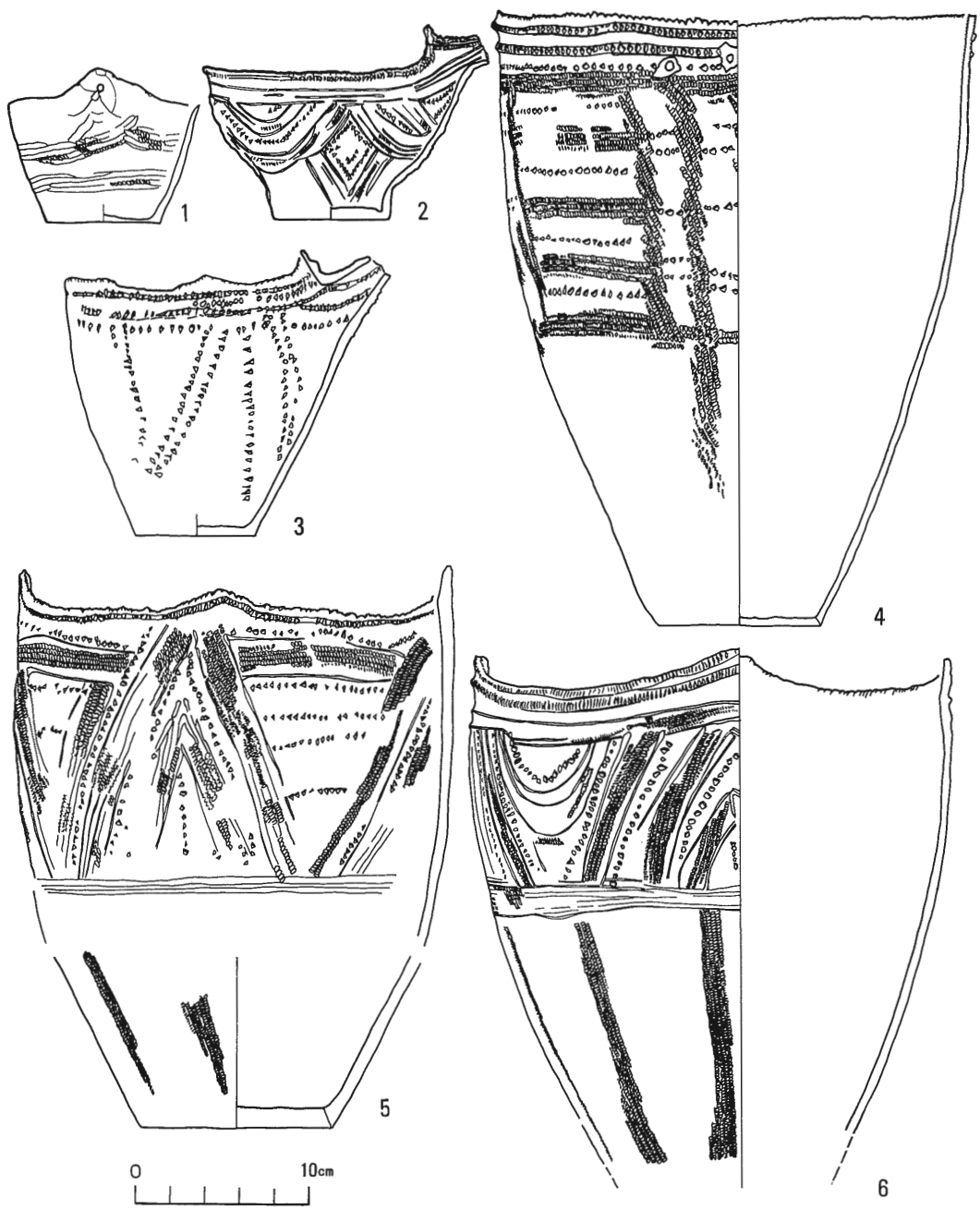
**　これと同じ技法は，晩期では青森・砂沢〔芹沢長介所蔵・東北大学保管，未発表〕に例があり，弥生では福島・天王山〔坪井1953：Fig.1—1・2，杉原・小林（編）1966，pl.23—18・19〕をはじめ，天王山式に類例がある．



個体番号		
1	4	
2	5 a～C	a～c
3	6 a～C	a～c
4	1	
5	3 a・b	a・b
6	2	

第16図　出土土器写真

第17図　出土土器の図



注　第17図は赤坂，北山，桑島，乳井，山本，豊嶋，熊谷，平山の作成した原図を横山が浄書した．

では水平に走る．これにくらべれば，大形深鉢のなでは方向も幅もはるかに不揃いである．

表面の仕上げの手順が完全に読み取れるのは個体番号6だけである．ほかの例とおなじく，すくなくとも上半部には，縄文を施文する前に篦磨きがかかっていたことがわかる（第18図8）．また胴下半部には，縦方向の篦磨きをかけるまえに，ななめ方向の篦削りが入っていたことが確認できる（同図7）．

したがって，

篦削り（下半部のみで確認・方向は斜）→

篦磨き（上半部・縦）→篦磨き（下半部・縦）

という器面調整の手順を復元することができる．なお，上半部は下半部にくらべてあたりの幅がせまく，方向も不揃いであるので，おなじ篦磨きではあっても区別した．削りと磨きのあいだに，普通なでが入るが，この工程は確認できなかった．あるいは上半部の磨きがこれにあたるのかも知れない．なお注口の付け根の部分にかぎって，まず縦方向の削りを入れ，指押え・磨きをくわえて仕上げた痕跡が残ることがある（第18図3）．

厚さはあまり変化がないが，全高の1／5ほどの範囲で口唇にむかってうすくなり，器種・器形にかかわりなく，口唇はとがり気味になる．表面は仕上げ・施文のときに整形の痕跡が消されているが，内面には，篦と指で，なでつけ・押えをくわえた痕跡が残っていることもあり（第18図2），篦削りを入れる前に縄文を施文した痕跡がある（第18図4）．

〔文様・施文の技法と手順〕　出土した土器に見られる文様は，縄文・微隆起線・刻目／刺突の三種類である．個体番号2・5・6は，この三種類の文様を組みあわせて意匠を表現しているが，個体番号4で微隆起線が欠けており，個体番号1では縄文，3では刺突だけで意匠を表現している．

縄文は，いわゆる〈束縄文〉（「長（条）原体」あるいは「長（条）縄文」と呼ぶのが妥当だろう）***で，極端に長い原体（個体番号4の文様帯下縁の縄文帯には条の長さが20cmを超える圧痕があり，10～13cmの圧痕は普通である）を用いる．佐原（1981，P・164）が指摘しているように，この原体に指を一本ないし二本あて，原体を回転させながら指をずらせば，原体と同じ長さの縦（横）はもちろん，弧状に走る縄文も容易に施文できる．さきに述べたように，長条縄文を施文するまえに，器面は磨きがかかっている．「地文」として縄文を施文するときにはこの様な手順は確認されていない．また，長条縄文は製飾的な効果を意識して，微隆起線・刻目／刺突などとともに意匠を組み立てる要素として用いられているほか，意匠帯の下縁を区画する役割もはたしている．この点にも，この種の縄文の特殊な性格をうかがうことができる．原体を確認できた例はすべて0段多条〔山内1979〕の左縄を用いており，0段の撚糸の数はおそらく4本前後であろうが，正確な数は確認できなかった．

刺突文の圧痕は三角形あるいは四角形である．圧痕にはささくれの痕跡は残っておらず，割り放しの片木などではなく，端に削りを入れた割箸，あるいは細い楔のようなものを用いたと推定できる．刺突文は意匠の構成要素として体部にかぎって施文される．刻目は，口唇・口縁に平行に走る隆帯に集中する．個体番号4・5の刻目と刺突（第18図5・10）は幅も形もそれぞれ一致するが，個体番号2・3・6の刻目は刺突にくらべてはるかに幅がせまい（第18図8）．刺突・刻目の施文におなじ原体を用いているとすれば，前者は割箸のようなもの，後者は楔のようなものだろう．

個体番号5・6の口縁部では，2～3cmの幅をひとつの単位として，そこに12～13個刻みを入れていることが圧痕のサイズと傾斜の変化から読みとれる。体部の刺突の場合は作業単位の幅は2～6cmで3～4cmがもっとも多く，回数は2～3回が普通である（第18図5・8）．

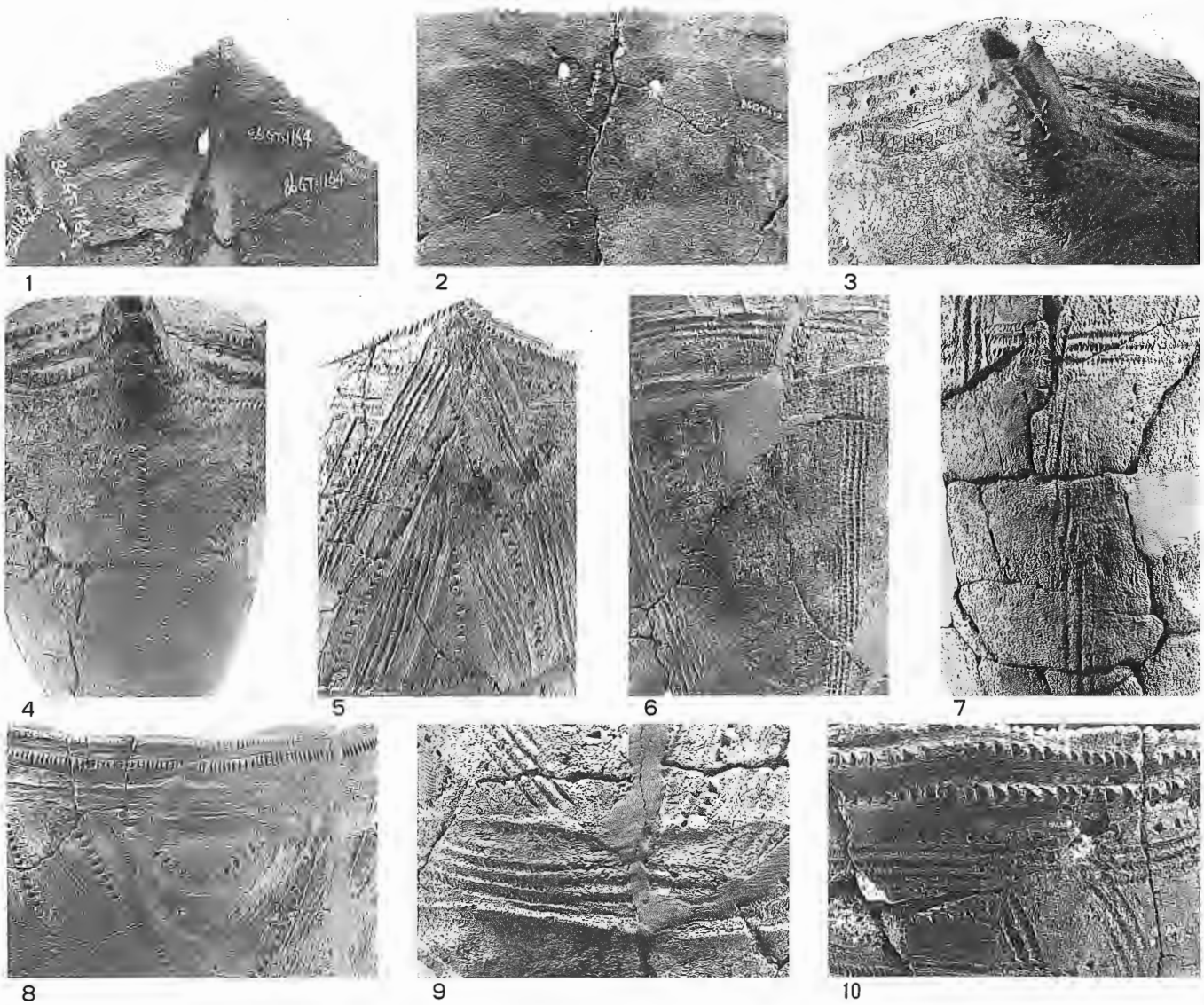
*** 実際とおよそかけはなれた〈束縄文〉などという死語は一日も早く駆逐すべきだろう．それはともかく，長条縄文は晩期中葉に東北々半部〔鈴木・林（編）1981，〕と北海道に出現し，晩期末-北海道・大狩郡〔藤本1960，鈴木・林(編)1981，参考図版164・195・196〕など一から続縄文の初期一青森・瀬野〔伊東・須藤（編）1982〕，同・二枚橋〔須藤1970〕など一にかけて実例が多い．天王山式（とくに東北北半部のもの）にも長条原体がさかんに用いられていることも天王山式の系譜を考える上で興味をひく．

これに対して，個体番号４の作業単位の幅は５～７cm（刻み）と４～５cm（刺突），作業の回数は，刻みが10～12・刺突が８～９で（第18図10），個体番号５・６よりも作業の息が長い．個体番号２と３をくらべても，おなじ傾向がみとめられる．個体番号２・５を作ったのはおなじ人物（グループ）で，個体番号３・４はこれとは別の人物（グループ）が作っているのではなかろうか．

微隆起線は細い粘土紐を貼り，その両側に調整をくわえたもので，基底部の幅が1.5～２㎜で，はっきりした稜が走る．口縁部の隆帯には二次的に手がくわわっていないので，太さ４㎜前後，長さ10～20cmの粘土紐であることがわかる．しかし微隆起線の場合は，二次的な調整のため，もとの太さは分からないし，粘土紐の継目らしい部分はあっても，長さを割り出すのは困難である．調整にしても，粘土紐の両側に指をあてた部分と片側だけに指があたっている部分が入りまじっており，さらに工具のあたりが残っている部分もあって，しかもその順序がまちまちなため，どれが基本になっているのか，よくわからない．

文様の切りあいや重なりにもとづいて，

第18図　出土土器細部写真



個体番号１：１、個体番号３：３・４、個体番号４：２・６・10、個体番号５：５・９、個体番号６：７・８

「縄文→微隆起線→刺突」の順で施文がおこなわれたことは確認できる．ただし，口唇上面と口縁部の隆帯の刻みが縄文施文に先立つのか，あるいは体部の刺突文と一緒に施文しているかはわからない．おなじ工具を使っている刺突や刻目の施文が一連の工程であったとしても，口縁部と体部のどちらに先に施文しているのか，それも確認できない．なお，個体番郡４～６は文様帯の上・下部には横位，文様帯の下一胴部下半には縦位の縄文帯****が走っており，いずれも縦方向の縄文帯よりも先に―いいかえれば文様としては一番早く族料されていたこと，したがって文様を施文する範囲をしめす役割を果たしていたことがわかる。

赤色の顔料が付着したもゆが２例出土している．いずれも褪紅色を呈し，二次的に熱を受けたものと考えられる．個体番号６には口縁部面に長さ20㎜，最大幅2.7㎜の条線が見られる．個体番号３は，注口内外面に顔料の付着が見られる．外面では（注口を上にして）上側左半分と注口の左下縁にさざられるが，内面では（同じく注口を上にして）注口の左側，胴径の ¼程の範囲にとくに顕著である．内外面ともに，刷毛あるいは筆のはしりは確認できない．顔料の彩度の高低（濃淡）は，注口の周辺では高く，遠ざかるにしたがって低くなっている．意図的に顔料を塗ったというよりは，赤色の顔料をふくんだ液体が染みついたように思われる．

〔文様の配置・意匠の構成〕　波状縁深鉢の場合（第19図）では突起が文様の配置を決定する目じるしとなっている．たとえば，個体番号５には，鋸歯文が２単位（Ａ１，Ａ２）．馬蹄形の文様（Ｂ）が１単位．いずれともつかぬ文様（ＡＢ）が１単位描かれている．そのうち，Ａ１の頂点は，突起の位置に正確に一致している（第18図５，第19図）．ほかの部分ではずれが目立つようになるが，いずれにしても文様の頂点は突起の近くにある．個体番号６でも，タマネギのような文様（Ａ１～Ａ４）の頂点は突起の下にある（第19図３）．これらの文様の中心が，突起の位置と一致する文様を主文様，主文様のあいだを埋めている文様を副文様と呼ぼう．この２個の場合，細部の違いを無視すれば，副文様は主文様の逆転したものとなる．

注口つきの鉢・深鉢に文様を配置する場合にも，突起が目じるしとなっている．ただし，すでに指摘したように，これらの土器の場合，注口のうしろの突起が主．その反対側にある突起が副となり，主・副にはさまれる住置にある突起はほとんど目立たない．したがって，注口のうしろにある突起と，それを折り返した位置にある突起を結ぶ軸線を意識して文様を割付けていた可能性がある．個体番号３には，注口の直下からほぼ垂直に走る刺痕列（Ａ１，第18図４，第20図）が施文されている．これとおなじ刺痕列は，注口の反対側の突起のある位置に施文されているだけで，ほかの場所には見られない．この二条の刺痕列は器面を二分する軸線を意識した文様の割付けをしめしているのだろう *****．

注口のつく鉢・深鉢の意匠は，文様そのものは４単位であるが，軸線をはさんで，主文様２個と副文様１個を一組として，軸線の左右に割付けている．これを２単位の意匠構成と呼ぶこととする．２単位の意匠構成は個体番号４にも見られる．この土器の文様は，文様帯の上下に向かい合わせに配置されている弧線（Ａ），水平に走る平行線帯（Ｂ），Ａ・Ｂの間を走る垂直な平行線帯（ｃ）で構成されている．したがって，この土器の意匠は，

《２（½ｃ．Ａ．ｃ．Ｂ．½ｃ）》

となり，これから副文様（A'1～A'4）を除けば，

**** いわゆる後北Ｂ，C_1式では，文様帯の上下および中央の三箇所を縄文帯が走っている．ここで記述している土器では，上の二本が姿を消しかかっており，文様帯下縁の縄文帯だけが残っていることになる．文様帯中央のものは意匠のなかに取りこまれているか，あるいは完全に姿を消してしまっているが，文様帯の上縁―口縁部の２～３条の隆帯で構成されている装飾帯の下縁にあたる―のものも，施文だけはされており，その上に微隆線を施文したために，ほとんど全面的に消されてしまったのである（第18図５・８），土器の装飾がひとつのシステムとしてのまとまりをもっており，土器の作りはその手順をかなり強く意識していたことをしめしている．

***** 土器の作り手が注口を通る軸を意識していたことは，個体番号２の注口の下，そしてその反対の位置にある副文様（弧線を組み合わせた菱形の意匠）が，側面に描かれている副文様よりもはるかにしっかりとした構成をしめしていることからも推測することができる．

と表現できる（第19図１）.
また個体番号５の文様構成は，

《Ａ１．A'1．Ａ２．A'2．Ｂ．A'3．AB．A'4》

《（Ａ１．Ａ２）.（Ｂ．AB）》

となる，さらに，ここで馬蹄形の要素（Ｂ，AB）に目をつけ，この要素をふくむ部分（ＲＢ）・ふくまぬ部分（ＲＮＢ）にわければ，

《ＲＢ，ＲＮＢ》

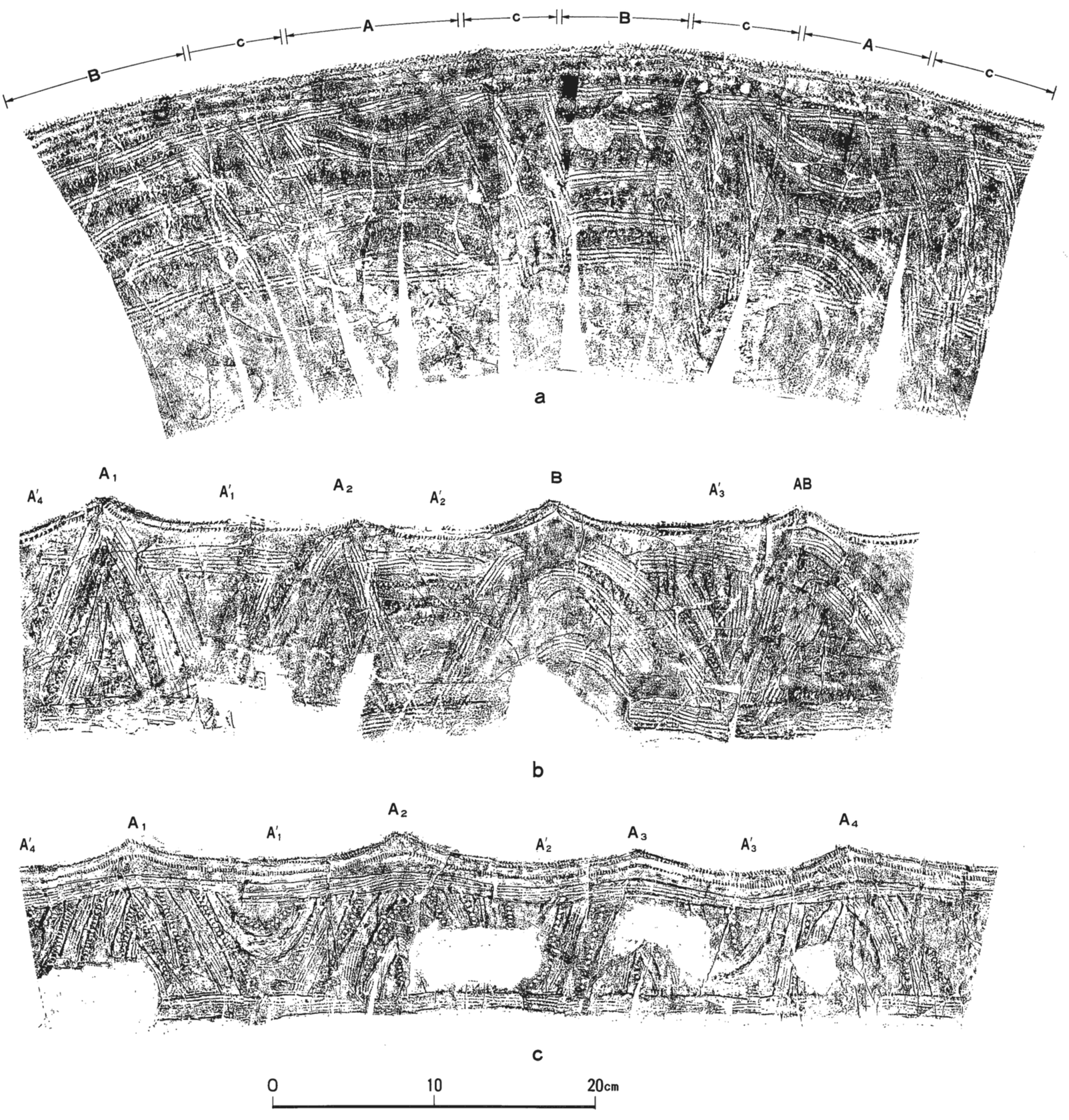
となり，やはり２単位の意匠構成となる（第19図２）.

出土した土器の意匠の構成を吟味して結果，２単位の意匠構成が支配的であることを確認することができた．この原理は，注口のつく鉢・深鉢にもっともはっきりとあらわれている．波状縁深鉢の突起の数はいずれも４個であり，ほかの遺跡の資料を見ても例外はない．この突起が主文様の配置—したがって意匠構成の単位の数を決定する役割をはたしていることはすでに指摘した通りである．とすれば，４山の突起をもつ土器の意匠を構成する主文様の数は，もともと４個であったはずで，２単位の意匠構成をしめす深鉢は，注口のつく鉢・深鉢の文様構成の影響をうけた，二次的なすがたをしめしていると考えなければならない．あらためて吟味するまでもなく２単位の意匠構成であることの明らかな個体番号４の文様には，２・５・６には目だっている微隆起線が見られなくなっており，文様構成の面でも変化がみとめられることは無視できない。

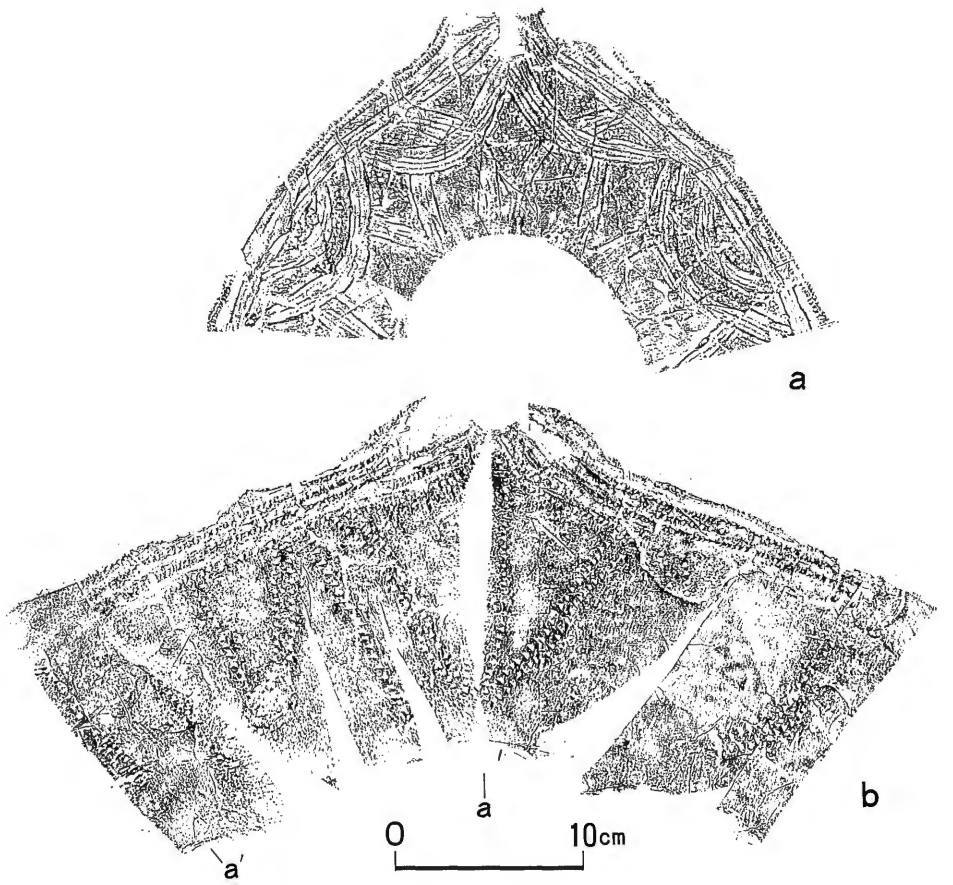
〔まとめ〕　出土した土器は，すべて後北C_2式の後半のものである．いずれも完形に復原することができ，それ以外の帰属不明の破片はきわめてわずかな量にとどまる．きわめて短い期間，限られた数の人間が活動した結果，この遺跡が残されたことをしめしているのだろう．作業単位の幅とその中での作業回数の観察にもとづいて，個体番号５・６と同４を製作した人物（ないしグループ）がちがっている可能性があり，したがってわずかながらも，時間的なずれがあることが推定できる．個体番号３・４は２・５・６にくらべて，文様帯・意匠の構成が単純になっており，あたらしそうな特徴をしめしている．したがって，この遺跡の形成は，個体番号２・５・６の土器が残された時期，個体番号３・４の残された時期の少なくとも二期に区分することができるだろう．個体番号１の土器がこれらとは別の時期に属するという確証がえられゝば，三期に分けることもできよう．

いずれにしても，一度に残された土器の量がきわめて少ないことは，この遺跡を活動の場としたそとびとがきわめて少数であり，しかも活動の期間も短かったことをしめしているといえるだろう．たえず流路を変えていたサクシュコトニ川の流域という立地条件を念頭におけば，このような遺跡の形成の過程も当然のものと理解することができるだろう．今日までの調査でわれわれが確認することができた北大構内の続縄文の遺跡はきわめてすくない．安定した微地形が形成されていなかったことをおおきな要因に数えることができるだろう．59年度に調査を実施したポプラ並木東地区の墓域（北海道大学1987，p.15—101）は安定した微地形の成立を反映しているのかもしれない．ここから出土した土器が，いずれもいわゆる北大Ⅰ（後北ｄ）式に限られていることは，この推測と矛盾しない．　　（林　謙作）

第19図　深鉢の意匠



第20図　注口つき鉢(ａ)・深鉢(ｂ)の意匠



《引用文献》（排列はアルファベット順）
藤本英夫　1960「北海道日高郡新冠村村大狩部の墳墓遺跡」『古代学』９，pp.159—168
北海道大学　1987『北大構内の遺跡．５—昭和57年度』
伊東信雄・須藤　隆（編）1982『瀬野遺跡』仙台・東北考古学会
佐原　真　1981「縄文施文法入門」永峯光一（編）『縄文土器大成３・後期』，pp.162—167，東京・講談社
須藤　隆　1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56，pp.110—165
杉原荘介・小林行雄（編）1966『弥生式土器集成（資料編１）』東京・日本考古学協会
鈴木公雄・林　謙作（編）1981『縄文土器大成４・晩期』東京・講談社
坪井清足　1953「福島県天王山遺跡の弥生式土器—東日本弥生式文化の性格—」『史林』36，pp．50—63
上野秀一・加藤邦雄　1987「Ｋ135遺跡」『札幌市埋蔵文化財調査報告』30
山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』東京・先史考古学会

2　石器

A　剝片石器——11点

この遺跡から出土した剝片石器は，黒曜石のスクレイパーだけである（第21図１～７，第22図１～６）．そのうち最大のものでも長さが2.1cmしかなく（第21図１，第22図１），この遺跡のスクレイパーは，小型品によって占められる．刃部の加工は片面，両面の二者がみられる。器形や刃部の形状は不定定である．

B　礫器——14点

この遺跡から出土した礫器は，石斧５点，敲石７点，凹石１点，凹・磨石１点の４種類である．

a　石斧

重量が150ｇ以上の大型品が２点（番号２，５）含まれる.石斧の調整は,研磨による磨製石斧が主体を占め，その中に擦り切り手法によるもの２点（番号１，２）が含まれる．しかし，刃部に近い部分に磨きがみられるものの，刃部も含め大部分は打製によって調整されたもの（番号５）もみられる．刃部は，破損などで不明の２点（番号１，４）以外両面からの研磨によって作出されている．

b　敲石

大部分は細長い礫を素材としており，その一端が使用されている．

c　凹石

破損品で全体の状態は不明だが，礫の平担面に幅１cm程の浅いアバタ痕がみられる．

d　凹・磨石

大型礫の平担面に幅１cm程の浅いアバタ痕がみられる一方，核が平らになるまで使い込まれている．

3　剝片・砕片

黒曜石，瑪瑙，粘板岩製の剝片・砕片が出土・回収された．

黒曜石製の剝片・砕片は396点出土した。そのうち，漆黒を基調とした肉眼的には不純物が少なく白滝産と推定されるものを「黒曜石１」，乳白色の縞模様や不純物が比較的多くみられ赤井川産と推定されるものを「黒曜石２」として区別した．

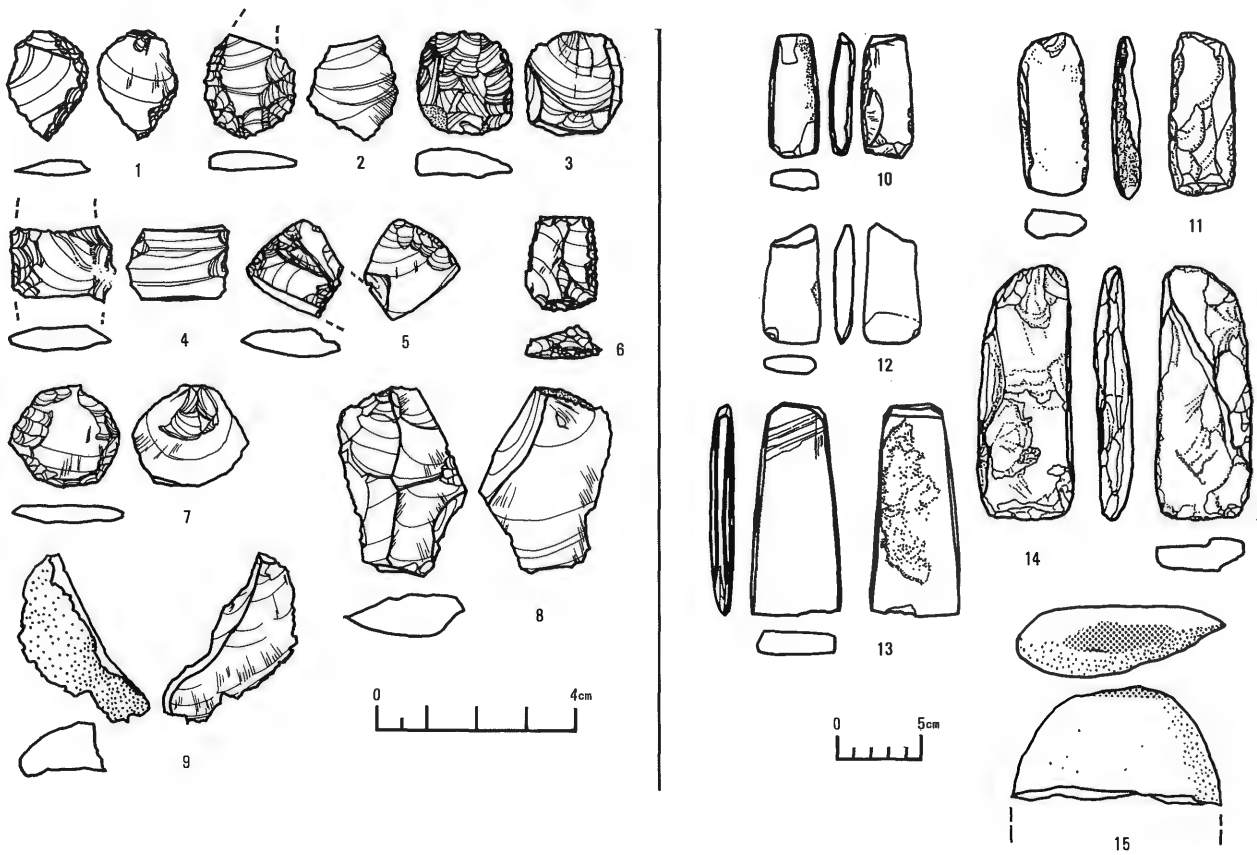
「黒曜石１」は総数380点で，そのうち長さ３cm以上のものは２点しかみられず（第21図８，９，第22図７，８），その以外は砕片である．「黒曜右２」は総数16点である。瑪瑙製のものは18点,粘板岩製のものは206点で，すべて砕片である．

第３表　礫器の計測表

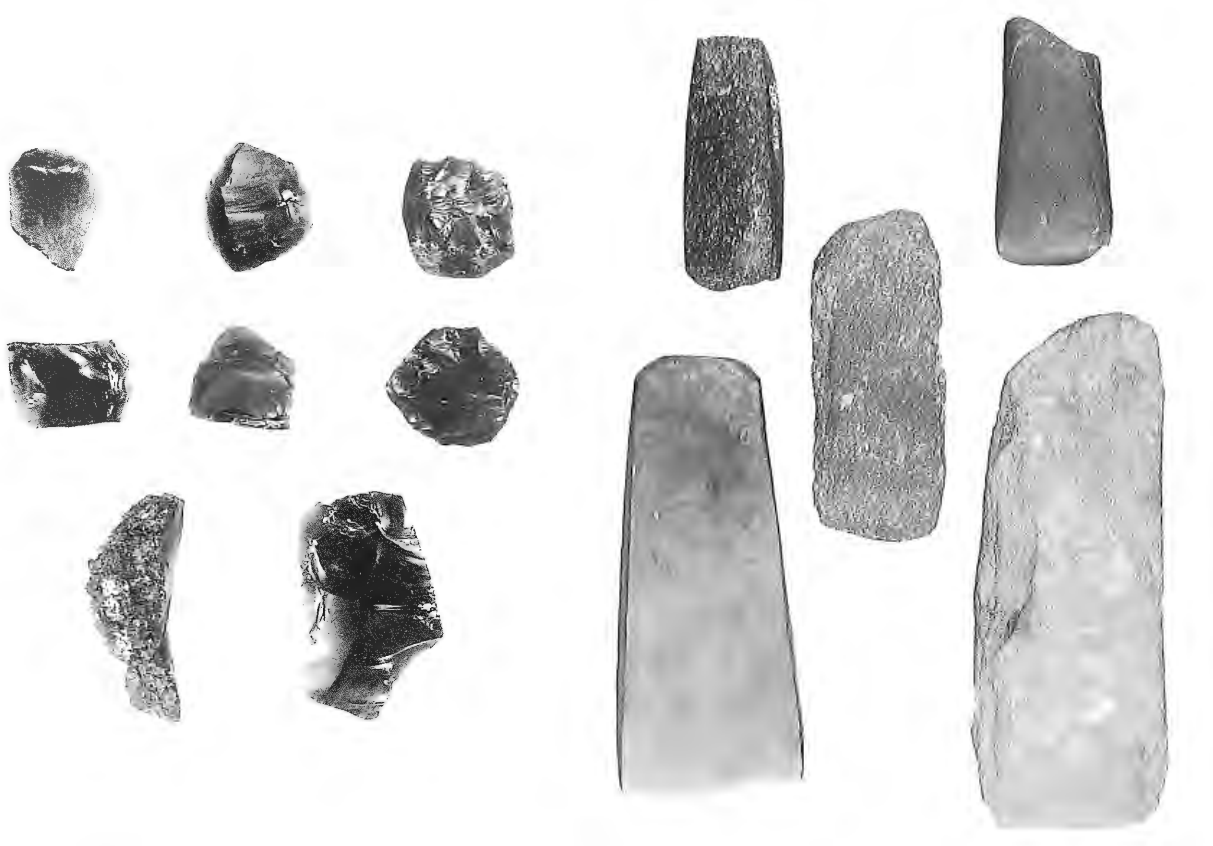
礫　器	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　量 (ｇ)	備　考
石斧１	6.96	2.98	1.18	40	第21図10
2	12.07	5.20	1.24	150	第21図13
3	6.76	2.98	1.18	40	第21図12
4	9.16	3.70	1.15	80	第21図11
5	14.32	5.49	2.01	220	第21図14
敲石１	8.47	4.70	1.80	100	
2	13.00	7.40	1.80	540	
3	17.00	6.20	4.35	540	
4	13.80	4.60	3.10	280	
5	12.50	6.30	5.36	500	破損,
6	12.50	5.80	3.14	380	第21図15
7	6.80	5.50	2.43	180	
凹石１	6.60	5.10	2.65	90	破損
凹･磨石1	41.00	20.00	11.50	8000以上	

第４表　礫の属性表

礫番号	重量 (g)	接　合　・　観　察
1	1740	４点接合―完形､加熱→分割→分散（ｂは焼土２）
2	620	２点接合―完形､ａは加熱なし､bは加熱(焼土１－Ａの炉石)
3	500	２点接合―完形､加熱→分割
4	1009	４点接合―完形､分割→分散→加熱（ｂ・ｃは焼土１－Ａ､ｄは焼土１－Ｅの炉石）
5	737	２点接合―完形､分割→分散→加熱（ｂは加熱なし、ａは焼土１－Ｅの炉石）
6	1080	５点接合―完形､分割→分散→加熱（ｄ､eは焼土１－Ａの炉石､ｃは焼土１－Ｅの炉石､ａ､bは炉外で礫番号８や10などと集中域を形成）
7	1240	３点接合―完形､分割→分散→加熱(但し、加熱はａだけ)
8	670	３点接合―半完形､分割→分散→加熱(加熱はａ､ｃ)
9	440	３点接合―半完形､加熱→分割→分散
10	486	３点接合―¾､分割→(分散)→加熱→集約



第21図　出土石器



第22図　出土石器

4　礫

拳大か，それよりひとまわり大きめの平らな河原礫が出土した．完全な形のものは3点で他は割れている．割れているものは2～4点ずつ接合し，10個の礫に復元された．また，礫の大部分に火を受けた痕跡がみられる．

5　動物骨片

これらはすべての焼土から出土した．実体が不明なほど粉砕されている．

6　植物種子

炭化したクルミの種子52点と，ヤマブドウの種子1点（「焼土2」）が焼土などから出土・回収された，クルミの出土箇所と数量は以下に示す（第5表）．

なお，フローテーションで回収された炭化植物片の中には同定の困難な雑草種子が若干含まれていた．しかし，栽培植物種子は未検出である（G．Crawfordによる）．

(3)　遺物の分布

1　土器の分布

A　個体別にみた分布（第24図）

個体番号1：破片がまとまって01-03（13）グリッドから検出された．この個体は，注口部分と口縁部の一部分の破片が発掘区域内にみられず，復元作業の結果完成品とはならなかった．

個体番号2：01-04（20）グリッドに破片が集中して検出された．そこは「焼土1」の東側約20cmの生活面である．他の破片は1点（02-04〔03〕グリッドの生活面）以外「焼土1」内もしくはその縁の炭化物分布域内に散在しており，口縁部の一部分の破片が発掘区域内にみられなかったが，ほぼ完形品となった。

個体番号3：破片がほぼまとまって01-03（22）グリッドから検出された。そこは「焼土1」の東側約1.6mの生活面である。他の破片は「焼土1-D」，「焼土2」あるいは焼土外の生活面に散在しており，口縁部の一部分と胴部のわずかな部分の破片が発掘区域内にみられなかったが，ほぼ完成品となった．

個体番号4：主に2箇所で破片が集中して検出された．1つは01-03（22）グリッドで口縁部から胴部までの破片が，もう1つは01-03（33）グリッドで胴部下半から底部までの破片がそれぞれまとまっていた．その間の距離は約70cmである．また，それ以外に「焼土1-B，C」などに6点の破片が点在していた．これらの破片をもとに復元された土器は，胴部下半のわずかな部分の破片が発掘区域内にみられなかったが，ほぼ完形品となった．

個体番号5：破片は01-03（23）グリッドを中心に，比較的広範囲に散在している．これらの破片をもとに復元された土器は，口縁部の一部と胴部下半のわずかな部分の破片が発掘区域内にみられなかったが，ほぼ完形品となった．

個体番号6：破片は01-03（23）グリッドを中心に，比較的広範囲に散在している．この破片の分布状況は，個体番号4，5，特に5と非常によく似ている．これらの破片をもとに復元された土器は，口縁部の一部分と胴部下半，底部が発掘区域内にみられなかった．

帰属不明の破片：その他に先に示した6個体の土器に直接あるいは間接的に帰属しない破片が56点出土した．それらは，01-03（23）グリッドを中心に，比較的広範囲に散在している．

第5表　クルミの出土箇所と数量

「焼土1」	37	「焼土2」	8
A	7		
B	5	「焼土3」	4
C	2		
D	21	「焼土4」	1
E	1		
縁	1	焼土外	2

第6表　焼土や“ブロック”の土器

焼土・“ブロック”名	個体番号	個体数
「焼土1－A」（ブロック5）	2	1
「焼土1－B」（ブロック4）	2，4	2
「焼土1－C」（ブロック3）	2，4	2
「焼土1－D」（ブロック2）	3，5	2
「焼土1－E」	2	1
「焼土2」（ブロック1）	3，5，6	3
「焼土4」	6	1
ブロック6	3，5，6	3
ブロック7	1，3，5，6	4
ブロック8	4，5，6	3
ブロック9	3，5	2
ブロック10	3，4，5	3
ブロック11	3，4，5，6	4
ブロック12	3，4	2

B　土器の分布

個体別土器の破片分布から，つぎのような特徴を読み取ることができる．

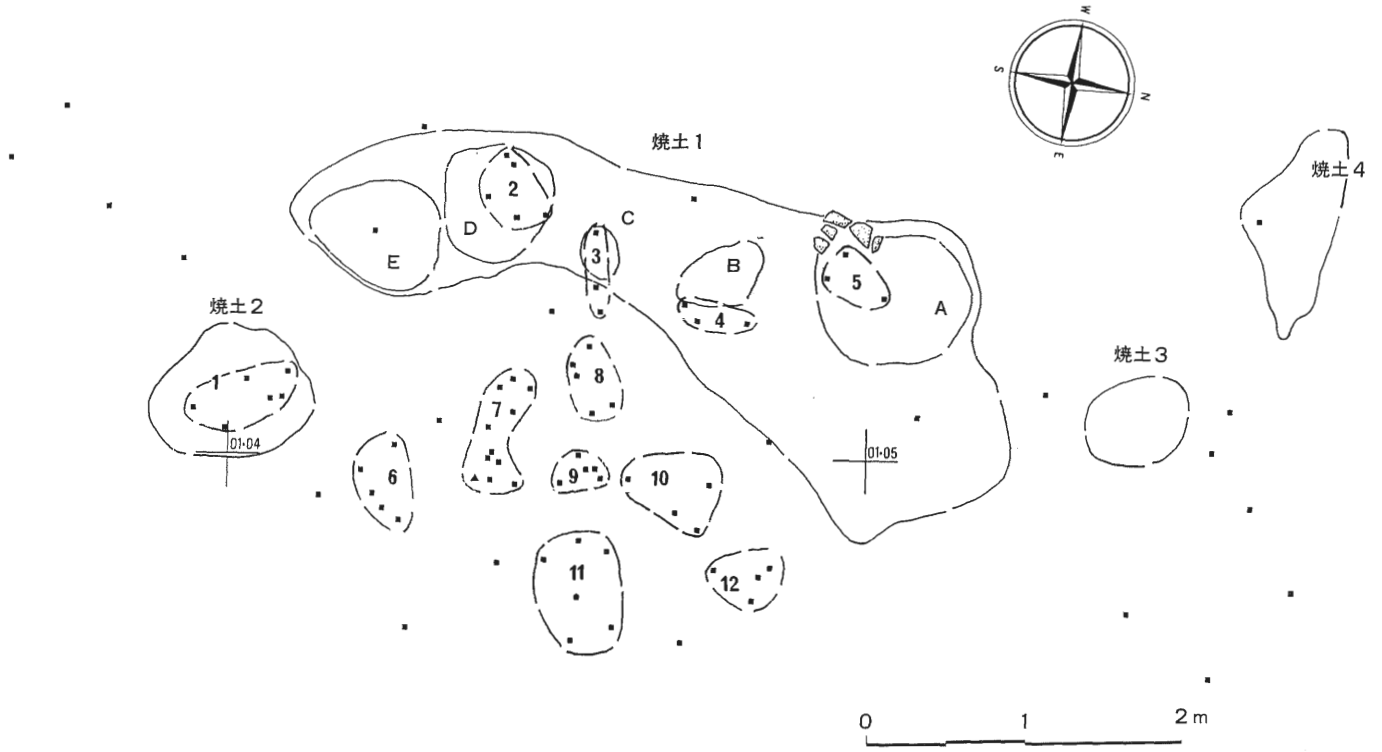
①　破片は１～２箇所にまとまって検出されることが一般的である．このまとまりは，注口土器と深鉢とで若干の差異をみせている．つまり，注口土器は１箇所に破片がまとまり，わずかな破片が他の位置に散在しているのに対し，深鉢は破片のまとまりが最低２箇所におよび，個体番号５，６のように他の破片が比較的広範囲に散在しているものもみられる．

②　土器の種類別による上のような破片のまとまりの傾向は，それらの出土状況や位置する場においても若干の違いが認められる．つまり，３個体の注口土器は一定の距離をおいて検出され，重復することはないし，個体番号３以外「焼土１」の縁に比較的近接した位置にみられたのに対し，３個体の深鉢と注口土器個体番号３は01-03グリッド内に大部分の破片が重復・混在しており，その中でも特に01-03（23）グリッドを中心とする長径130cm，短径100cmの範囲内に礫器・礫など他の器物とともにもっとも遺物が集中する場を形成していた．

2　剝片石器，剝片・砕片の分布（第25図）

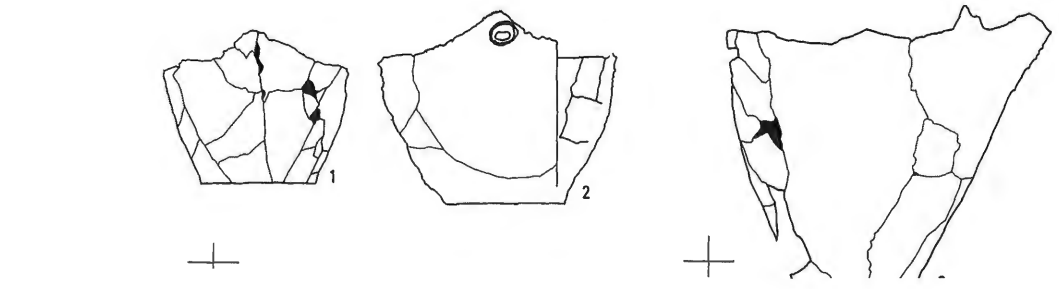
「黒曜石１」：総数390点で，剝片石器（スクレイパー）が10点（分布図には★印で示す）と剝片・砕片が380点(分布図には■印で示す)によって構成されている。分布は,「焼土1-A」を中心とする１群,「焼土1-D・E」を中心とする１群,「焼土２」を中心とする１群の計３群に及び，いずれの群にもスクレイパーを含んでいる．そのほか，「焼土３」」や焼土外にも分布していが明確な群をなさない．

「黒曜石２」：総数17点で,剝片石器(スクレイパー)

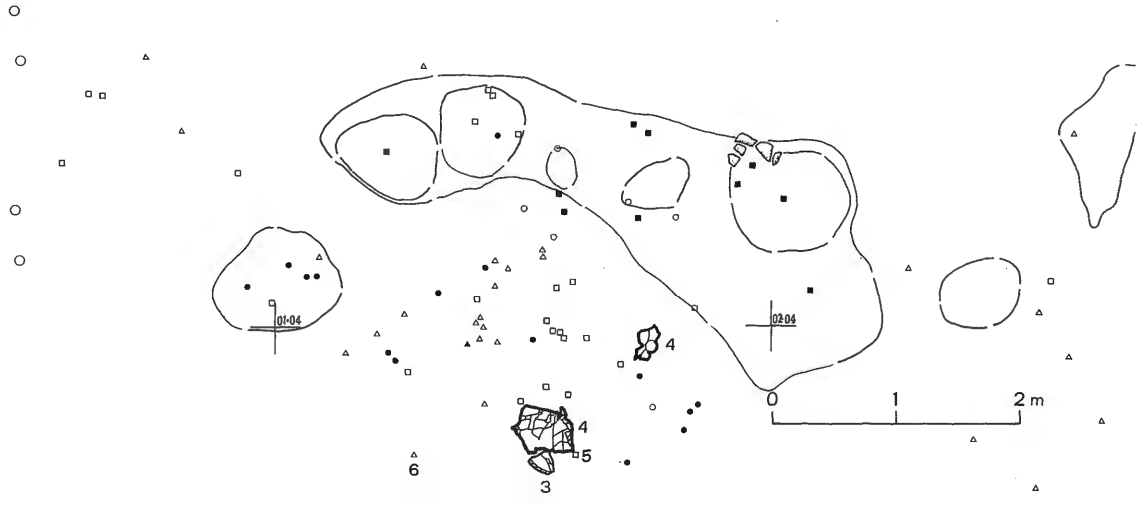


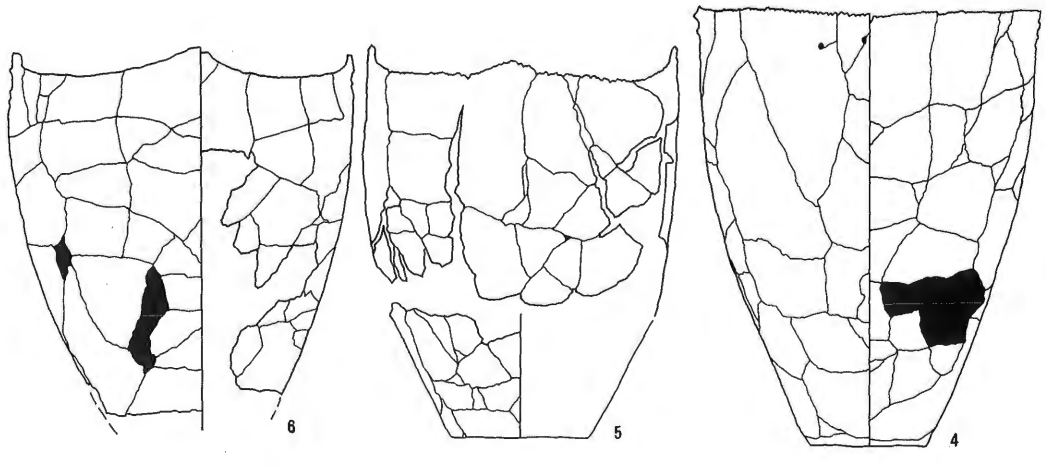
第23図　土器破片の“ブロック”

第24図　土器破片の分布

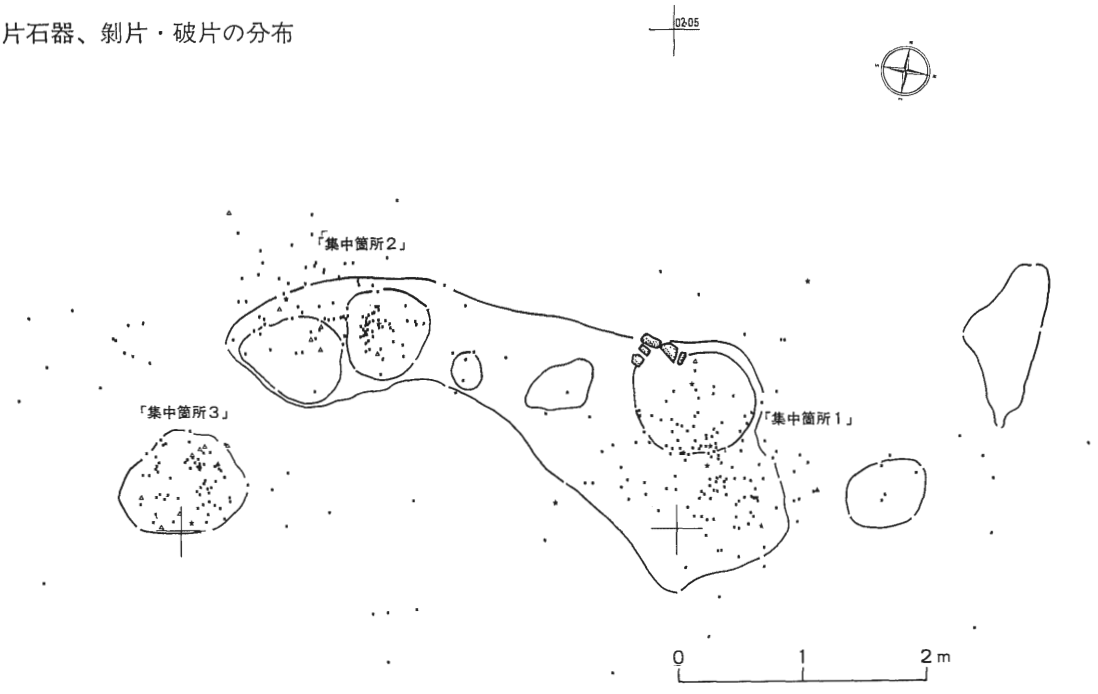


▲：個体番号1
■：　〃　2
●：　〃　3
○：　〃　4
□：　〃　5
△：　〃　6



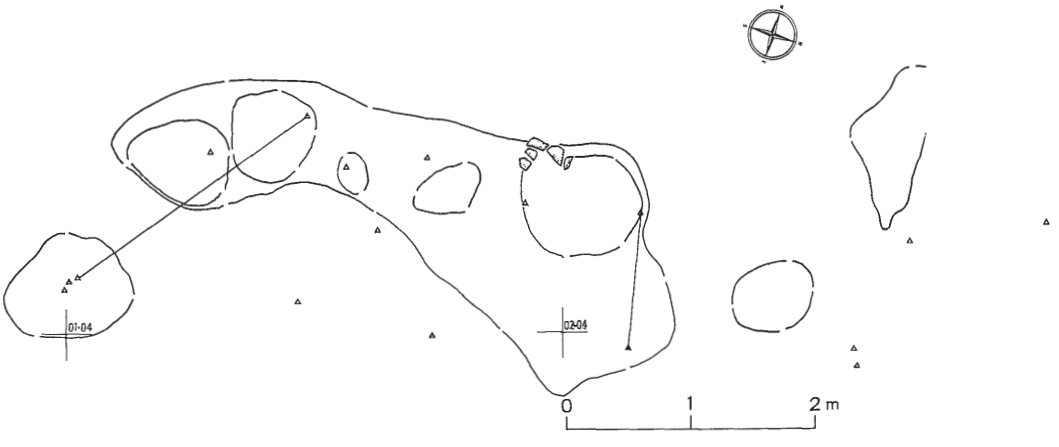


第25図　剝片石器、剝片・破片の分布



①黒曜石製石器、剝片・砕片の分布状況

凡　例
★黒曜石１の石器
■黒曜石１の剝片・砕片
▲黒曜石２の石器
△黒曜石２の剝片・砕片

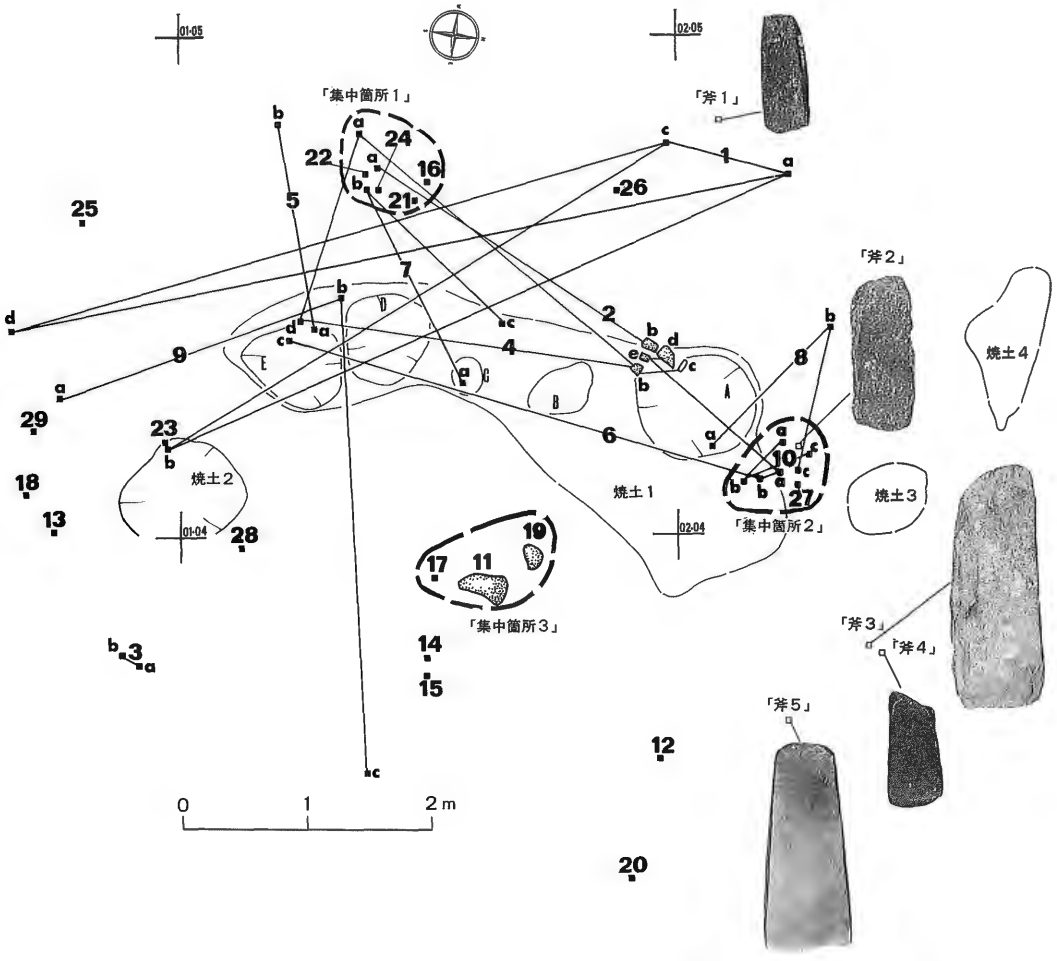


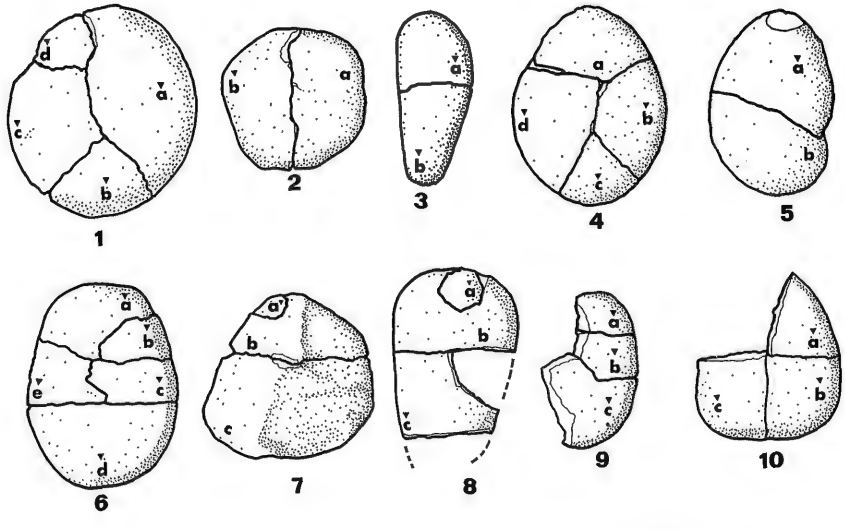
②瑪瑙製剝片・砕片の分布状況



③粘板岩製剝片・砕片の分布の分布状況

第26図　石斧と礫の分布





注：▼は焼けを示す。

が１点（分布図には▲印で示す）と剝片・砕片が16点（分布図には△印で示す）によって構成されている．剝片・砕片の分布は，「焼土1-A」と「焼土1-D」に１点，「焼土1-E」およびその縁に４点，「焼土２」およびその縁に８点みられた．スクレイパーは，「焼土１」と「焼土２」との間（02-04〔10〕グリッド）にみられた．しかし，この資料だけの集中箇所はみられない．

瑪瑙：総数18点の剝片・砕片が出土している．分布は，焼土群を中心に散在しており，特に集中箇所はみられない．

粘板岩：総数206点の剝片・砕片が出土している．分布は，「焼土1-A」とその縁の炭化物分布域に90％が集中してみられ，これ以外特に集中箇所はない．

3　石斧や礫器，礫の分布（第26図）

石斧：総数５点出土している．分布状況から，つぎの３点の特徴を読み取ることができる．

①　「斧３」と斧４」の２点の石斧が極めて接近して出土（02-03〔13〕グリッドで約10㎝の距離）した以外，分布にまとまりがみられない．

②　５点とも焼土あるいはその縁の炭化物分布域内にはみられず，それ以外の生活面に分布している．その中で焼土にもっとも近い位置にみられた「斧２」でも，「焼土1-A」から約40㎝，「焼土３」から約60㎝離れていた．

③　特に，「焼土1-A」や「焼土３」を基準にしてみると，その西側（「斧１」）とその北・北東側（「斧２」～「斧５」）とに分布が限られており，他の場所には全くみられないという共通点をもっている．

礫器・礫：総数52点出土している（敲石７，凹石１，凹・磨石１などの礫器は９）．これらの分布状況から，つぎのような特徴を読み取ることができる．

①　不完全ながら遺構―石囲い炉の形態を示すまとまりが，三箇所（「焼土1-A」，「焼土1-E」および「焼土２」）で検出された．「焼土1-A」の炉石を「炉石１」，「焼土1-E」の炉石を「炉石２」，「焼土２」の炉石を「炉石３」とよぶ．その他に遺構とおぼしき在り方を示すものはみられない．

②　遺構以外の礫器，礫は三箇所で比較的まとまった在り方を示すものの，大部分のものは散在している．三箇所でのまとまりについて，01-04（12）～01-04（13）グリッドのまとまりを「集中箇所１」，02-04（00）グリッドのまとまりを「集中箇所２」，01-03（23）グリッドのまとまりを「集中箇所３」とよぶ．

「集中箇所１」は，長径0.7m，短径0.3mの範囲内の礫７点を指す．この箇所の礫は３点の割り石も含め，火熱を受けたものはみられない．割り石は，「炉石１」と二組み（礫番号２，４），「炉石２」と一組み（礫番号４）のほか「焼土1-C」（礫番号７）などと接合した．

「集中箇所２」は，長径0.6m，短径0.3mの範囲内の礫器（敲石）１点と割り石７点を指す．この箇所の礫器，礫はすべて火熱を受けている．割り石は，「炉石１」と一組み（礫番号６），「炉石２」と一組み（礫番号６）のほか焼土外と一組み（礫番号８）接合した．

「集中箇所３」は，長径0.9m，短径0.4mの範囲内の２点の礫器（敲石，凹・磨石）と１点の礫を指す．

（横山英介）

第27図　発掘状況



1　発掘風景（西南からみる）



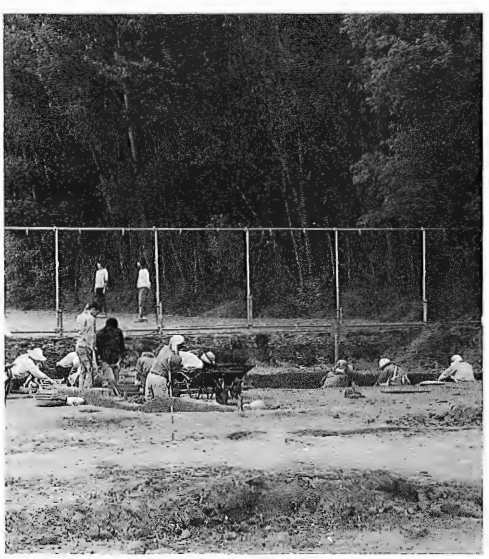
2　焼土遺構の発掘（東からみる）



3　焼土遺構の発掘（北からみる）



4　発掘と遺物の記録（西からみる）



5　発掘風景（西からみる）

第28図　地層状況、焼土遺構



1　土層堆積、最上位の土層が遺物包含層（南からみる）

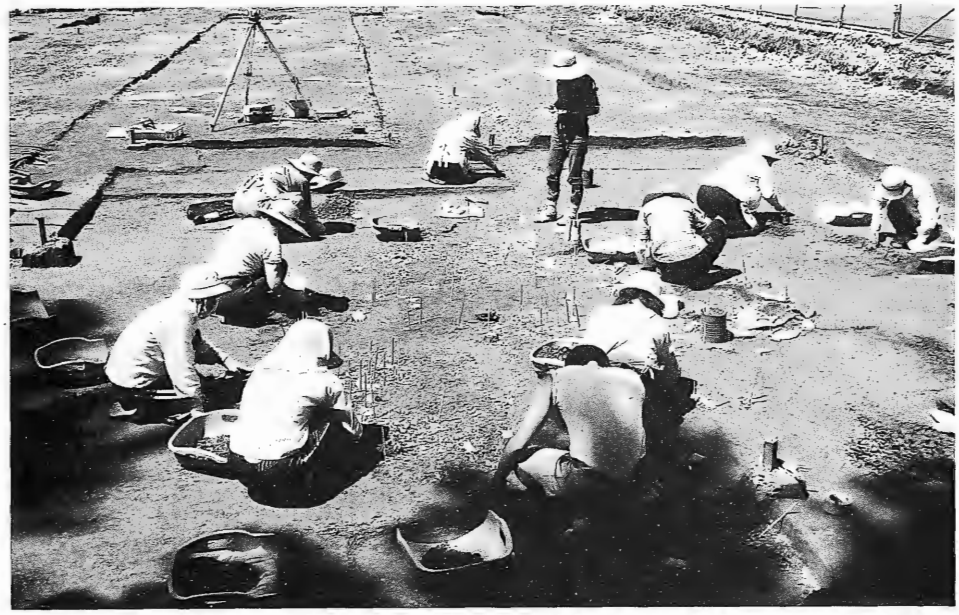


2　焼土１と礫群の発掘（南東からみる）

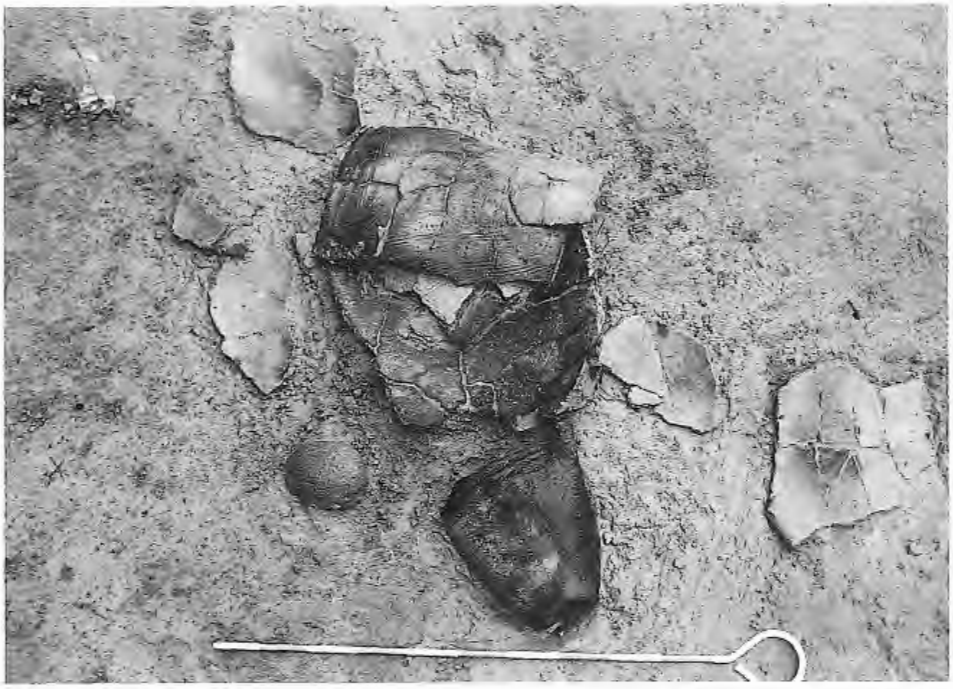


3　焼土１と礫群（南東からみる）

第29図　遺構の発掘や遺物の取り上げ



1　焼土群とその周辺の発掘、林立するハシは遺物の位置を示している（東南からみる）



2　焼土の東側、生活面上の土器、中央に甕（個体番号④）、下に注口（個体番号③）がみえる



4　まとめ

現在までの整理・分析にもとづけば，つぎのような所見を提示することができよう．

①　遺跡の時期は，出土した土器の諸特徴から，続縄文期後葉―後北C_2式土器が製作・使用されていた，西暦3世紀末～4世紀代の頃である．

②　遺跡は，標高約13.5mの低位面に営まれており，大小8箇所の焼土（炉）を中心とする約90㎡の小範囲内に，破損した注口・深鉢などの土器やスクレイパー，石斧，敲石，凹石などの石器類，さらに黒曜石，瑪瑙，粘板岩などの剝片，割り石・礫などが集中して出土した．

③　焼土（炉）には，破損した上記の人工遺物のほかに，破砕・炭化した動・植物遺体が含まれていた．

④　この遺跡から出土した土器の個体数は，わずかに6個体と少なく，また石器類も同様に種類，数量共に少ない．さらに，遺構が小規模な焼土（炉）だけ，という状況からみても長期に亘る生活の拠点的な場ではなく，極めて短期間に形成された野営跡であった可能性を示している．

⑤　さて，それでは野営の目的は何であったろうか．残念ながら，このようなわずかな出土品から直接それを確定することは困難であった．一応，この野営地のすぐ南側に川が確認されていることなどの状況証拠にもとづけば，その主要活動が河川漁撈などの生業を目的とした遺跡であったと推定することもできるだろう．その一方で，われわれが発掘調査で目にした遺物の大半は廃棄されたもの，と推定された．つまり，炉を中心に主要活動が展開され，その過程で破損したり不要となった器物は，主としてこの野営地を撤収する際に廃棄したのであろう．いわば，主要活動と廃棄の場とが複合された，二重構造から成る遺跡と言ってよいだろう．

北大構内で遺跡の発掘調査が開始されて7年目．小規模ながら，比較的まとまった続縄文期後葉―後北C_2式土器が製作・使用されていた頃の遺跡が，はじめて調査された．現状ではもっとも古い時期の遺跡，ということになるわけである．それは，集落でも墓地でもなく，河川漁に関する生業の場と推定されるものであった．これを契機に，河川を巡る遺跡の相互関係が検討されるような調査を目指したい．　（横山英介）

第III章　野営地の再構成　—考古学資料を用いた人間行動の復元—

はじめに

この小稿は，本書の第Ⅱ章3「学生部体育館建設予定地の調査」の報文をもとに，特に遺跡の性格について分析しようとするものである．

一般的に遺跡は，長期間にわたって繰り返えしヒトが住み着き，したがって住居跡などの遺構が集中して発見されるため，そこで行なわれた諸活動を示す区域を明瞭に追跡すること自体困難な場合が多い．

しかし，この非常に小規模な遺跡は，続縄文期のなかでも極めて限定された短期間に形成されたと推定されるため，空間的な諸活動が的確に復元され得ると判断したからである．ここで用いる分析の手法は，当然ながら発掘調査によって我々が得た考古学的遺構，遺物の出土・分布状況をもとにした，極めて基礎的なものである．その結果得られた，この小規模遺跡に対するかなりの確証をもった仮説は，続縄文期の生業体系の一端を理解することができたことはもとより，ヒトの活動域が複雑に累積された様々な遺跡の仕組みの解明にも適用できるであろう．

1　遺物分布からみた“場”の性格

この遺跡から出土した遺物は，続縄文土器6個体分，剝片石器11点，礫器14点，石製剝片・砕片620点，礫43点などである（第1表）．この項では，種類別にみた出土遺物の分布の特徴から“場”の性格付けを試みる．

個体別土器の分布にみられた特徴（pp．38～39，第24図）は，これらの土器がいずれも使用時のままの状態を保っていたのではなく，二次的に現位置にまで移動されたもの，つまり，それらは廃棄されたものであるという仮説が成立するだろう．

そこでまず最初に，4個体分の土器破片がまとまって検出され，器物の廃棄の主体をなすと推定された01-03（23）グリッドを中心とする長径130㎝，短径100㎝の範囲内の状況をみてみよう．ここから検出された4個体分の土器の破片の在り方からみて，これらの土器は現位置に持ち込まれる以前に破損していた可能性がある．例えば，個体番号4にみられる主として2個所の破片のまとまりなどは廃棄後に起きたというよりは，持ち込み方のあらわれ，とみた方が合理的である．つまり，煮沸に用いられていたこの土器は，破損後主として胴部下半までを境として2つの部分が別途に，恐らく直接的にこの廃棄場にまで持ち込まれたものと推定されるからである．しかも，ここでみられた2つの部分のまとまり方は，この土器の使用時での破損が，胴後下半あたりにまず生じた可能性をも示している。その一方で，この個体の残り5点の破片は，二次的に個体番号2など別個体の土器破片とともに廃棄された状況を示している（第6表，第24図）．同じようなことは，個体番号3の注口土器にも言えるであろう．

この2個体の土器にみられた破片の在り方は，他の4個体の土器でもとりわけ個体番号5，6とは著しい相違を示している．それが何に起因するのかは推測の域を出ないが，この遺跡の場合，恐らく土器の使用，廃棄に時間差があったのではないか，と考えられる．つまり，少なくとも破片にまとまりのみられる土器の方が，散在し

ているものより廃棄が新しい場合がある，という解釈である．

また,大筋として上のような解釈が成立したとしても，新しい段階での廃棄とみられた土器破片と，古い土器破片とで複数のまとまりを形成する状況をどのように考えたらよいだろうか．仮りに，この遺跡における土器破片の廃棄単位の最大規模を，01-03（22）グリッドでみられた個体番号４の口縁部から胴部までの破片のまとまりに求め，長径60cm，短径40cmの範囲をそれと仮定したとしよう．そして，その範囲を基準としてこの遺跡における土器破片のまとまりを求めると，平面的には10箇所を上回る集中箇所（“ブロック”）を抽出することが可能である（第23図）．つぎに，このようにして抽出された“ブロック”をみると，その大部分が，２～４個体の異なった土器破片によって構成されている（第６表）わけである．これに対しては，もっとも新しい土器の廃棄の過程で古い土器破片が混入した，と解釈するのが妥当であろう．つまり，より古い過程での廃棄漏れのほかに廃棄の場が複数にわたっていた可能性が考えられるわけである．それはまた，個々の土器の破片が完全に揃わなかったり，帰属不明の土器破片が存在している（第１表）ことからも裏付けられる．これらの土器破片は，この地点以外の地域に集積ないし廃棄されていると考えた方が理解し易いからである．

土器破片の廃棄は，以上のような場のほかに，非常に少量ではあるが炉跡にもみられた（第６表，第24図）．その伴出関係は,少なくともそれぞれの炉の廃絶以後に，そこが土器破片など廃棄場として利用されたということを示しており，従って，そこにみられた大半の土器と炉の使用時期とがほぼ一致するとみなすこともできるだろう．

石質別にみた剝片石器，剝片・砕片の分布（Ｐ．39）から，つぎのような特徴を読み取ることができる．

①　分布の主体は，三箇所の焼土上にみられる．

②　「黒曜石１」や粘板岩のように，分布の集中箇所を抽出することができるものと，「黒曜石２」や瑪瑙のようにそれができないものとがみられた．

③　全体の分布状況は，「黒曜石１」にみられた３群によって代表される．北側から順に「集中箇所１」,「集中箇所２」，「集中箇所３」とよぶ（第25図）．

「集中箇所１」は，「黒曜石１」のほか粘板岩の集中箇所とも重複し，長径２ｍ，短径1.7ｍのほぼ円形の範囲内を言う．「集中箇所２」は，「黒曜石１」を主体とし,長径1.5ｍ,短径１ｍの不整形の範囲内を言う.「集中箇所３」は，「黒曜石１」を主体とし，0.8ｍ×0.8ｍの不整形の範囲内を言う．さらに，いずれの集中箇所とも少量の「黒曜石２」や瑪瑙を混在し，また，スクレイパーが含まれている．

さて，以上のような剝片石器，剝片・砕片の在り方に対してどのような性格付けができるだろうか．

まず，各々の集中箇所は石器の使用や製作時のままの状態を保っているのではなく，それから二次的に現位置にまで移動，廃棄されたもの，という仮説が成立するだろう．焼土に重複してみられた３つの集中箇所は，恐らくそれぞれの炉の廃棄直後にそこが廃棄場として利用されたものとみられる．ということは，これらの石器や石器製作とそれぞれの炉の使用時期はほぼ一致すると考えるのが妥当であろう．

３つの集中箇所とも主体を占めるのは「黒曜石１」であり，そのうち１箇所（「集中箇所１」）で粘板岩の集中的な廃棄と重複していた．また，いずれの集中箇所にも少量の粘板岩(ただし,この場合は「集中箇所２・３」のものだけを言う），「黒曜石２」，瑪瑙，さらには土器破片の混在している様子を伺うことができた．これは「黒曜石１」に混入し廃棄されたもので，同時に，剝片

石器，剝片・砕片の廃棄が土器破片の廃棄と併行して行なわれたことも示している．

つぎに，石斧や礫器・礫の分布にみられた特徴（p. 42）は，どのように整理されるだろうか．

まず，石斧は，大部分の礫器・礫と同様使用後に直接ないし,間接的に現位置に廃棄されたものと推定される．

礫器・礫のまとまりのうち，「集中箇所２」はその中に礫番号６ａ，ｂなど「炉石１」，「炉石２」あるいはその双方から直接ないし，間接的に廃棄されたと推定されるものを含んでいた．また，特にまとまりを示さないが「炉３」から廃棄されたと推定される礫もみられたので，これらの石囲い炉は，その不完全な形態からも伺われるように，すでに解体されて原型を保っておらず本来の機能を失った状態を示すもの，と推定される．

「炉石１」や「炉石２」と関連するもう１つの「集中箇所１」は，恐らくそこで石割りなどが行われた，いわば工作場と推定される性格を強く示している．この場で割り取られた礫は，直接的あるいは間接的に「炉石１」や「炉石２」に持ち込まれ使用されたと推定される．

以上の分析をもとに，場の性格や形成過程などについて要約するとつぎのようになるだろう．

①　石囲い炉など火を伴う作業場，炉石に使用する礫の割り取りなどを行った工作場，そして廃棄場という３つの性格付けができる場が確認できた．

②　少なくとも三箇所の炉が石囲い炉であると推定されたが，いずれもすでに解体され原型をなしていなかった．そのうち，「炉石１」と「炉石２」の２つの石囲い炉へは，一箇所でみつかった礫の割り取り場（「集中箇所１」）から割り石が持ち込まれ，炉が作られたと推定された．この炉については，礫の割り取り場は共通するものの，炉石の廃棄場，つまり「集中箇所２」がどのように形成されたのかによって，それらの製作，使用，廃棄に至る経過が異なってくる．そこで，礫の接合（第26図）をもとに，炉石の廃棄に至るまでの経過を示せば，主としてつぎの９通りが想定される．

a　「集中箇所１」→「炉石１」・「炉石２」→「集中箇所２」

b　「集中箇所１」→「炉石１」→「炉石２」→「集中箇所２」　「集中箇所１」

c　「野中箇所１」→「炉石１」→廃棄（「集中箇所２」など）　「炉石２」→「集中箇所２」　「集中箇所１」

d　「集中箇所１」→「炉石１」→「集中箇所２」→「炉石２」→廃棄　「集中箇所１」

e　「集中箇所１」→「炉石１」→廃棄→「炉石２」→「集中箇所２」　「集中箇所１」

f　「集中個所１」→「炉石２」→「炉石１」→「集中個所２」　「集中個所１」

g　「集中箇所１」→「炉石２」→廃棄（「集中箇所２）など）　「炉石１」→「集中箇所２」　「集中箇所１」

h　「集中箇所１」→「炉石２」→「集中箇所２」→「炉石１」→廃棄　「集中箇所１」

i　「集中箇所１」→「炉石２」→廃棄→「炉石１」→「集中箇所２」　「集中箇所１」

さて，以上のうちどの経過がもっとも可能性があるだろうか．まず,一般的に古い炉ほど原型を留めていない，つまり礫が抜き取られているという判断に立つなら「炉石２」の廃絶が「炉石１」より古いと仮定することができよう．とすると，可能性として残されるのはｆ～ｉの４つの場合である．しかし，この中からどれか１つを特定することは難しいから，ここではそれらの経過をおお

まかに比較しながら検討し，可能性を探ってみよう．

まず，「集中箇所１」で割り取られた礫が「炉石２」へと持ち込まれ石囲い炉が作られる，という経過はいずれからも伺うことができる．その経過に違いが生じるのは，「炉石２」から「炉石１」へと礫が再利用される過程で，それが直接的（ｆ，ｇ）になされたのか間接的（ｈ，ｉ）になされたのかという点である．仮りに前者だとしたら，この遺跡の石囲い炉で完全を形状を保っていたものがみられないので，炉の廃絶は礫の廃棄をも伴うものと推定されるから，礫の廃棄の場が「集中箇所２」を含むかどうかは別としても，ｇに示したような経過が想定される．それはまた，「炉石１」の礫の廃棄場の１つとして「集中箇所２」が極めて近い位置を占めている点からも言えることである．これと同じ見方を後者に適用すれば，ｉに示したような経過が想定されるだろう．

つまり，ｇ，ｉいずれかの経過をみても，「炉石２」から「炉石１」への礫の再利用が直接なされたか否かにかかわらず，炉石の廃棄を伴って行なわれたこと，そして「炉石１」の廃絶などに伴う炉石の廃棄場は「集中箇所２」にも求められることが推定される．

一方，「炉石３」については，「炉石１」や「炉石２」の礫の割り取り場に相当する「集中箇所１」のような場が特定できなかったが，この炉から直接あるいは間接に廃棄されたと推定される礫が，比較的近い位置（00-04〔21・31〕グリッド）とかなり離れた位置（01-04〔33〕，02-04〔03〕グリッド）で「散在していたもの」の中から検出された．

ここで，この遺跡から発見された炉の変遷をみると，つぎのようになるだろう．

まず，炉の切り合いから，「焼土1-D」→「焼土1-E」（「炉石２」）という先後関係が成立する（→第Ⅱ章-3-(1)，p．25）．「炉石２」と「炉石１」の先後関係は上で検討したように，「炉石２」が「炉石１」より古いと想定された．このような炉の先後関係は，この遺跡の炉が単設で使用・変遷したことを示している．したがって，「焼土２」（「炉石３」）は，「焼土1-D」にもっとも近い残存状況を示していたから上にみた炉の変遷過程に組み込むことは難しく，この遺跡で検出された炉の中ではもっとも初期の炉と推定される．これを整理すると，炉の変遷は，

「焼土２」（「炉石３」）→「焼土1-D」→「焼土1-E」（「炉石２」）→「焼土1-A」（「炉石１」）となるだろう．

以上の検討を通じ，この遺跡から検出された掘り込みを伴う４基の炉の基本的な構造は，石囲い炉であったと推定された．そして，これらの石囲い炉の礫は，新たに供給されるものと共に，古い炉の礫を再利用するという特徴を読み取ることができた．

③　「集中箇所３」と５本の石斧も含めた礫の「散在していたもの」の廃棄は，どのように考えられるだろうか．まず，「散在していたもの」の中には，先にもふれたが「炉石３」から廃棄されたとみられる礫が確認された（礫番号１）．そのうち，かなり離れた位置（01-04〔33〕，02-04〔03〕グリッド）に散在していた礫の比較的近くに「斧１」が，また同様に，「集中箇所２」の中には「斧２」が含まれている．この２本の石斧が後から二次的に混入したものでないとしたら，先に示した炉の変遷からみて「斧１」の廃棄が「斧２」より先行したであろうと推定される．

しかし，残り３本の石斧や「礫集中箇所３」など多くの礫の廃棄が，どの炉と対応するのか直接確かめられてはいない．そのうち何点かの帰属は，恐らくそれらと共伴関係にある他の遺物の動向から得られるであろう．

２　遺跡の構成と変遷

この遺跡から発見された８箇所の焼土と土器破片や石器類，礫などの遺物の分布・出土状況などを分析した結

果，ここに当時の人々が残した活動域は，主として2つの異なった性格を持つもので，それらが複合して機能していた様子を知ることができる．

まず，この小遺跡で主要な活動域の遺構は，掘り込みを持ち，よく焼けた4箇所の炉である．これらの基本的な構造は石囲い炉で，それぞれが単設で使用されていたと推定された．炉の周りには，住居の構造などを示すような掘り方や踏み固められてよく締まった床面，柱穴などの遺構は検出されていないので，これらの炉が住居に付設されていたと断定することはできないが，1つの炉を中心にテント状などの極めて簡易な構造物があった可能性は否定できない．

さらに，これらの炉は「焼土2」がもっとも古く，「焼土1-A」がもっとも新しいと推定されたので，主要な活動域の占地が，川に比較的近い場所から少しずつ離れた位置へと移動，変遷したことを伺わせる．

このほかに，炉石などの礫を割り取った，いわば「石割り場」と特定できた区域が少なくとも1箇所存在した（礫「集中箇所1」）．そこで準備された炉石は，古い時期の炉石の再利用を伴って，少なくとも「焼土1-A」(「炉石1」）や「焼土1-E」(「炉石2」）に供給されていたことが突き止められた．

以上のような主要活動域とは異なった性格を持つ場に，器物などを廃棄した区域がみられた．廃棄場は，一部分で主要活動域と重複するものの，大部分がそれと隣接した区域で取り囲むように形成されており，なかでも東側に広がりをもっていた．

このうち，炉跡には少量の土器破片や礫などを混在するものの，黒曜石製石器，剥片・砕片が非常に高い密度で出土している．これは，恐らく炉の廃絶に伴ってこれらの器物類が廃棄されたものと推定された．したがって，そこに廃棄されていた器物は，その炉より古い時期に使用されたものも含まれているだろうが，大部分はその炉の使用とほぼ同じ時期と推定される．

次に，炉跡が黒曜石製石器，剥片・砕片類の主要な廃棄場であったのと違って，それと隣接した区域は土器や礫など他の器物の廃棄場として利用されていた．特に，その中でも東側の広場には，土器の一括破片や礫器をまとめて廃棄したと推定される区域が設けられていた．これらの器物の廃棄は，先に示したような炉の廃絶とほぼ対応しており（第6表），この場で1つの炉を中心として主要な活動が行われ，それがほぼ終了するのに伴って器物が廃棄された，ということを伺うことができる．このように，炉に隣接した区域が土器や礫などの主要な廃棄場として繰り返し利用された結果，それらが他の区域よりも著しく高い密度で出土した，という背景を読み取ることができよう．

以上のような活動域の復元を通じ，この遺跡を残した人々の活動の様子がどのようなものであったか推定してみよう．炉を中心とする主要な活動域は，その規模や出土遺物の量などからみて，ここが多人数の集団によって長い期間利用された生活の拠点的な場ではなく，小人数—恐らく5人前後の集団によって極めて短い期間，しかも限定された期間だけ利用された野営地であったと考えられよう．時期や季節を決める証拠に乏しいが，炉の中から出土した極めて少量の植物種子，例えばヤマブドウはこの野営地が利用された季節を示していると言えよう．ただ，この野営地が1年のうち秋季に少なくとも4回程度利用されたのか，あるいは秋季利用が少なくとも4回程度に及んだのか，全く確証がない．

いずれにしても，この遺跡はその利用が秋季に亘る季節的な野営跡であり，広く豊平川流域に生活していた続縄文期の人々が，特定の生業活動を行っていた場所，と言えよう．しかし，彼らがこの野営地で行った生業活動の主体は，ついに明らかにすることができなかった．こ

こに最初に野営した小集団の所持品で我々の目に止まったものは，1～2個の煮沸用容器のほかに1～2本の磨製石斧，2～3本のスクレイパー，一握りの黒曜石や瑪瑙などで，それらは極めて簡素な内容であった．このような廃棄された器物の中から，少なくとも彼らがこの野営地で行った主要な生産活動を読み取れるような道具類は見い出せない．ただ，その場所が小河川沿いであることなどからみて，恐らくサケ科魚類の捕獲も対象とした野営地であったと考えるのが妥当であろう．

それよりもむしろ，発掘調査によってわれわれがほぼ明らかにし得たのは，野営地でのすごし方の，しかもその一断面であった．彼らは，川に面した平坦な場所を選び，持ち運んできた数個の礫を割り取って小さな石囲いの炉を作り，恐らくその上をテント状の簡易な小屋掛けで覆い，ここでの諸活動の拠点としたであろう．

短い生業活動の間に排出された廃棄物は，野営地を撤収する際にまとめて処理された．破損した煮沸用容器や抜き取られた炉石などは，主に諸活動の拠点としていた場所に隣接した東側や南側の広場に廃棄された．また，廃品となった剝片石器や石器加工での不要な石くずは，まとめて炉の中に捨てられた．

ここに最初に野営した小集団によって作られた，このような諸活動の拠点の場と廃棄場は，その後この地点を，少なくとも3回に亘って利用した小集団にほとんどそのまま受け継がれることとなる．つまり，この小規模な野営地にみられた漁撈採集民の行動パターンは，この野営地が同一集団によって，しかも継続的に利用されたことを物語っているだろう．（横山英介）

付篇　北大構内遺跡出土の植物遺存体関連資料

北海道大学構内の新寮建設工事に先立って実施されたサクシュコトニ川遺跡は，西暦9世紀の擦文時代集落である．ここでは，擦文時代の文化層が上下2層検出されているが，それらは共に河川の氾濫に由来する砂質粘土層によって覆われていた．後世の攪乱の恐れのないこの文化層には，いたるところに炭化物質の細片が含まれていたのでフローテーション法による種子の採取が実施され，大量の標本を得ることに成功，その一部が報告されている（北海道大学1986．Crawford 1986）．北海道大学埋蔵文化財調査室では，サクシュコトニ川遺跡出土のこれらの炭化種子および炭化植物細片の整理作業を，その後も継続実施している．また，比較研究のために各地の遺跡で採集された種子や現生種子*などの標本も収集し始めた．本篇では，こうした作業過程の資料を含めて紹介しておきたい．

第30図には，現生およびサクシュコトニ川遺跡出土（炭化物16）のホオズキ・イヌホオズキ・イガホオズキの全体像および部分拡大像を示した．また同遺跡出土のアワ・キビの部分拡大像を示しておく．松谷も指摘するように（松谷1984　pp.630～634，1988 pp.91～104），アワ・ヒエ・キビの同定にはこうした細部のSEMによる観察がきわめて有効である．

第31図には，今まで遺跡出土例について報告されたことのない穂軸（rachis）の資料を現生のコムギの穂軸のものと比較して示しておく．サクシュコトニ川遺跡（炭化物16）からは，この種の穂軸が大量に採集されているが，北海道大学埋蔵文化財調査室の整理作業の中では，詳細な観察は着手され始めたばかりである．現生の標本と比較してみる限り，形態は類似するがサイズは小さい．しかし，ここから発見されているコムギがきわめて小型のものであるので（Crawford and Yoshizaki 1987，pp.205～208），おそらくムギの穂軸として分類して良いのではないかと考えられる．しかし，オオムギなのかコムギなのかについては，まだ決定しかねている．

第32図は灰像に関する資料である．灰像については，古く近藤・笠原が述べており（近藤・笠原 1934），またその考古学資料への応用については渡辺の詳しい紹介がある（渡辺 1973，1974）．炭化植物細片の中には，14，15に示すように「石英細胞」の観察できるものがあり，今後フローテーション法によって採集されるこうした細片資料の同定観察に利用できることが確実になった．第33図～第36図には現生のアワ・ヒエ・キビ・キンエノコロ・エノコログサの全体像と部分拡大像を比較のためにあげておいた．

いままでの作業で明らかになったことは，低湿地遺跡のように植物遺体が特別に保存される場所でなくても，炭化植物片がわずかにでも含まれている場所においてサンプリングの方法さえ誤らないかぎり豊富な情報が得られることが確実となった．花粉分析以外にもここにとり上げたような微細な資料の蓄積が，古代の食生活と環境復元に大きな役割を果たすであろう．

謝辞

ここで述べられている作業の推進は，多数の人々の応援があって初めて可能になったのである．なかでも，走査電子顕微鏡の操作についてご指導くださった北海道大学名誉教授石田茂雄先生，平川泰彦氏，種子研究の糸口を作ってくださったトロント大学人類学部Gary W. Crawford博士，Catherine D'Andrea氏，カリフォルニア大学の高宮広土氏，標本の検討を許可された北海道大学環境科学研究科の伊藤浩司教授，北海道開拓記念館の山田悟郎氏，資料の採集に協力してくださった米原ふさ子氏に感謝したい．

（付記）

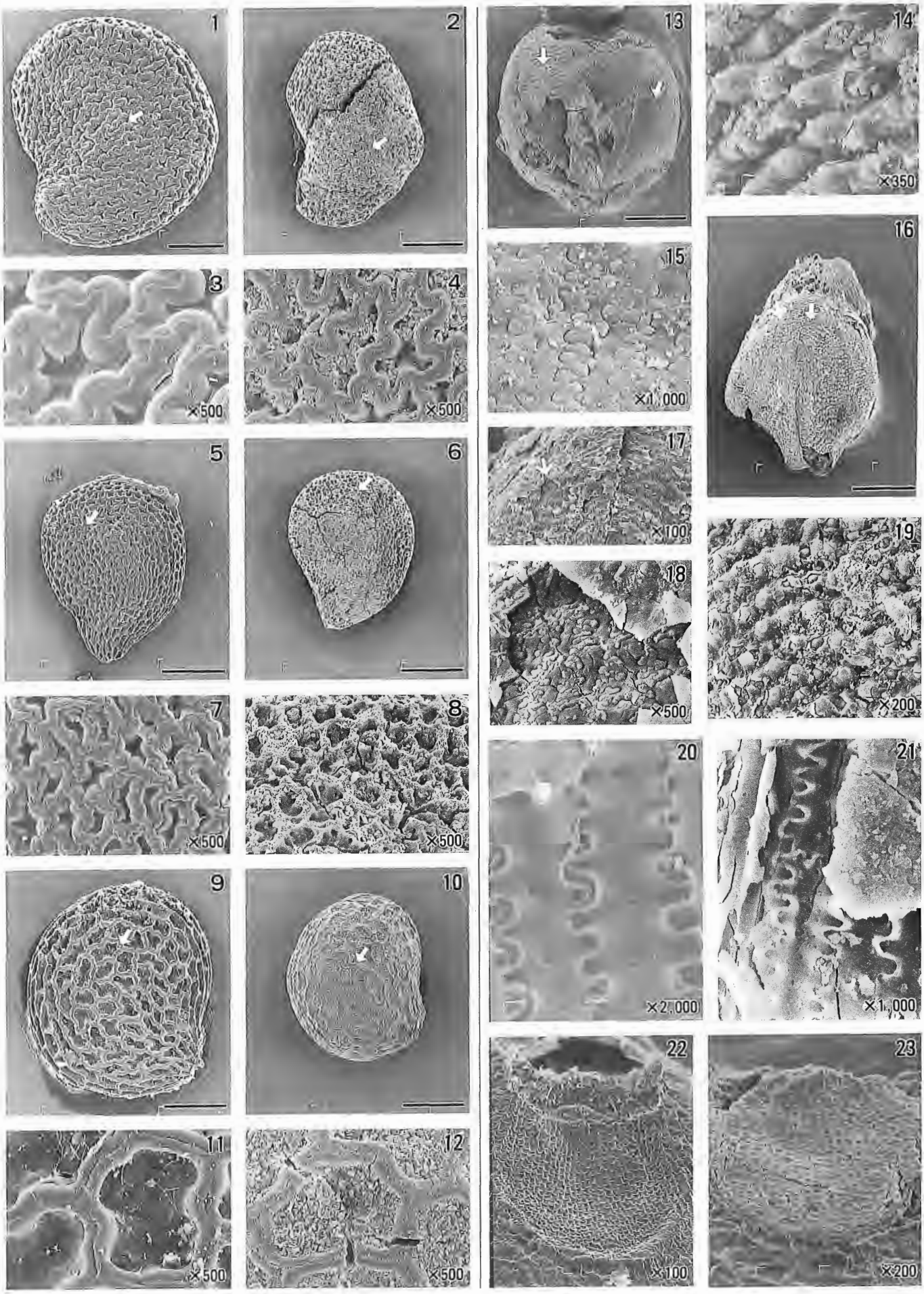
本篇で報告した作業は，北海道大学埋蔵文化財調査室の資料整備計画として実施したものであるが，プロジェクト・チームの主任である北海道大学文学部基礎文化論講座人類学研究室吉崎昌一助教授の1987年度科学研究費一般研究（C）「北海道における先史時代の農耕活動について」の作業で準備された装備と資料を利用したことを付け加えておく．　（椿坂　恭代）

*アワ・ヒエ・キビの現生種子は，北海道大学農学部付属農場で栽培されていたものを用いた．

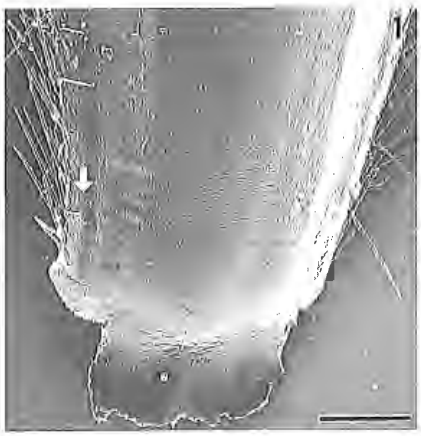
〔引用文献〕（排列はアルファベット順）

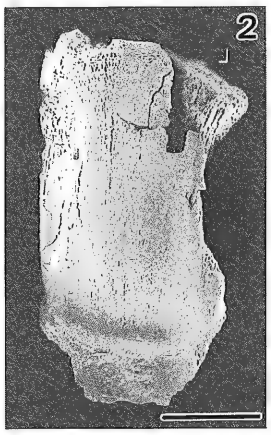
大井次三郎
1983：『新日本植物誌』「顕花編」至文堂
笠原安夫
1985：『日本雑草図説』養賢堂版 pp.406～492
近藤萬太郎・笠原安夫
1934：「粟，黍，稗及び近縁植物の顎の灰像の比較研究」『農学研究』23，pp.199～242
北海道大学埋蔵文化財調査室
編1986：『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学 328p.370pls.
松谷暁子
1984：「走査電顕像による炭化種実の識別」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』古文化財一総括班 pp.630～637
松谷暁子
1988：「電子顕微鏡でみる縄文時代の栽培植物」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』日本放送出版協会 pp.91～117
渡辺直径
1973：「灰像による植物遺残の検出法について（上）」『考古学研究』20―2，pp.65～73
1974：「灰像による穀物依存遺残の検出法（下）」『考古学研究』21―1，pp.56～62
Crawford, Gary W.
1986：SAKUSHU-KOTONI-RIVER PLANT REMAINS.in『北海道における初期農耕関連資料』
北海道大学文学部 pp.1～21
Crawford, Gary W. and M.Yoshizaki
1987：Ainu Ancesters and Prehistoric Asian Agriculture.
Journal of Archaeological Science 14，pp.201～213
Charles,M.P.
1984：INTRODUCTORY REMARKS ON THE CEREALS.*BULLETIN ON SUMERIAN AGRICULTURE.* Volume I pp.17～31
MATSUTANI, Akiko
1987：Identification of Japanese Millet from the Gangetu Site by Means of a Scanning
Electron Microscope.『人類学雑誌』Vol.95，NO 2．pp.187～193
Renfrew,Jane M.
1973：『Palaeoethnobotany』248P.,130figs.,48pls., METHUEN & CO LTD

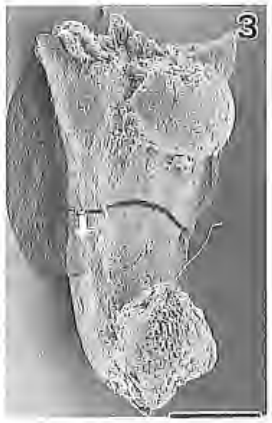
第30図　出土炭化種子と現生種子の走査電顕像



第31図　出土炭化穂軸と現生コムギ穂軸の走査電顕像

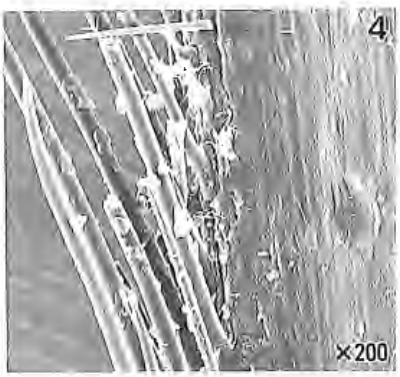


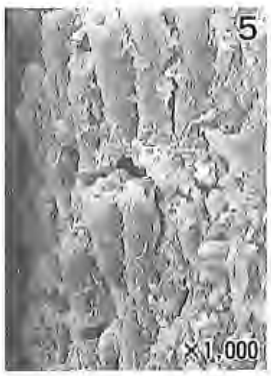


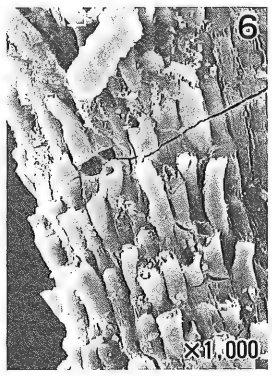




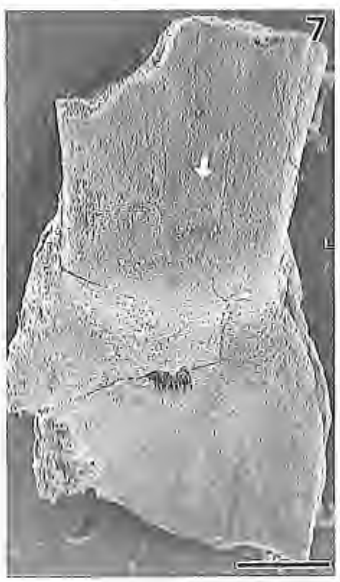
コムギの穂軸（RACHIS）

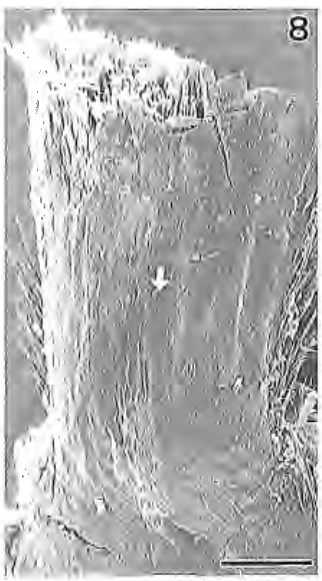


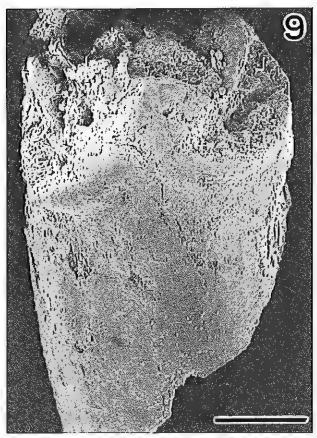












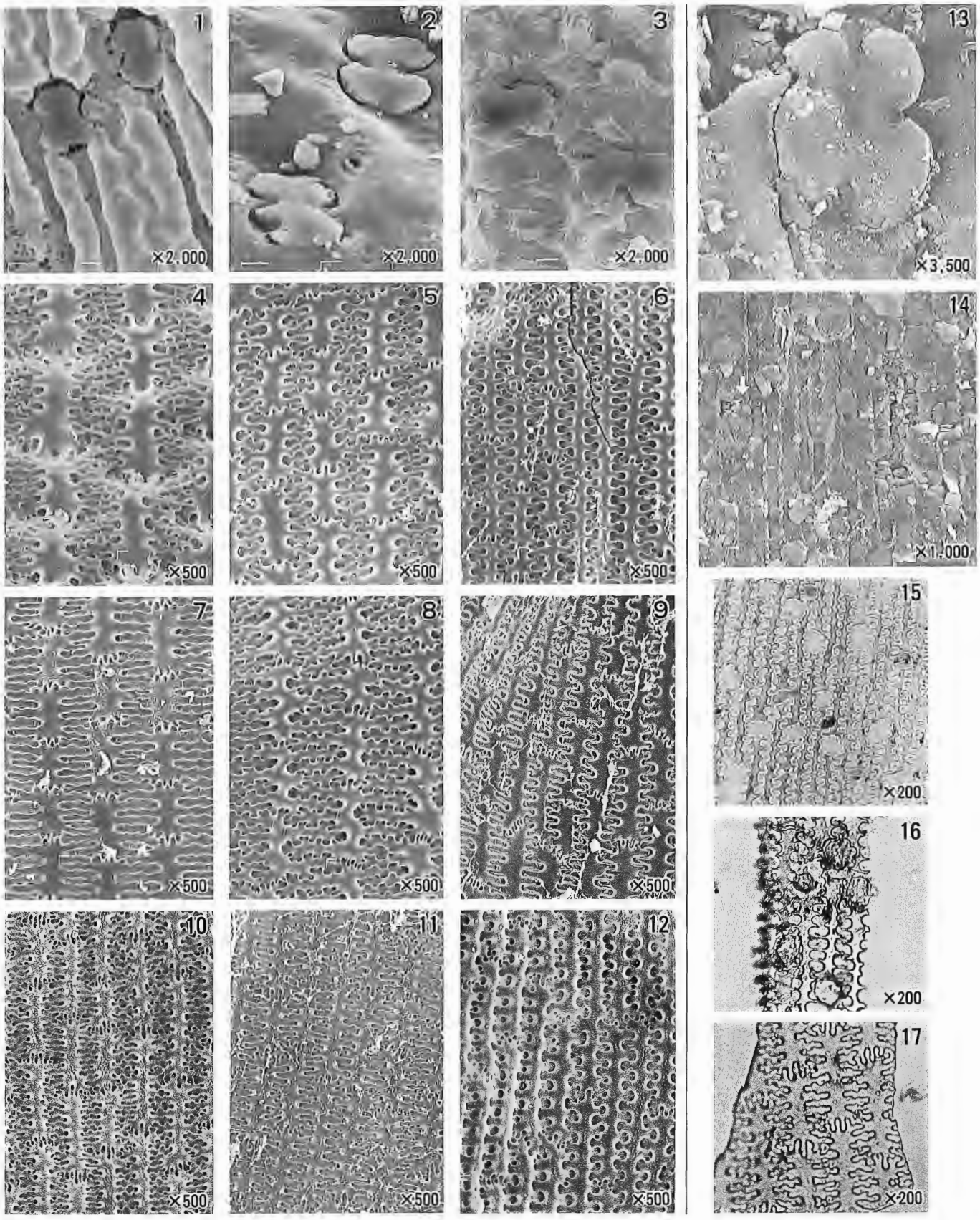




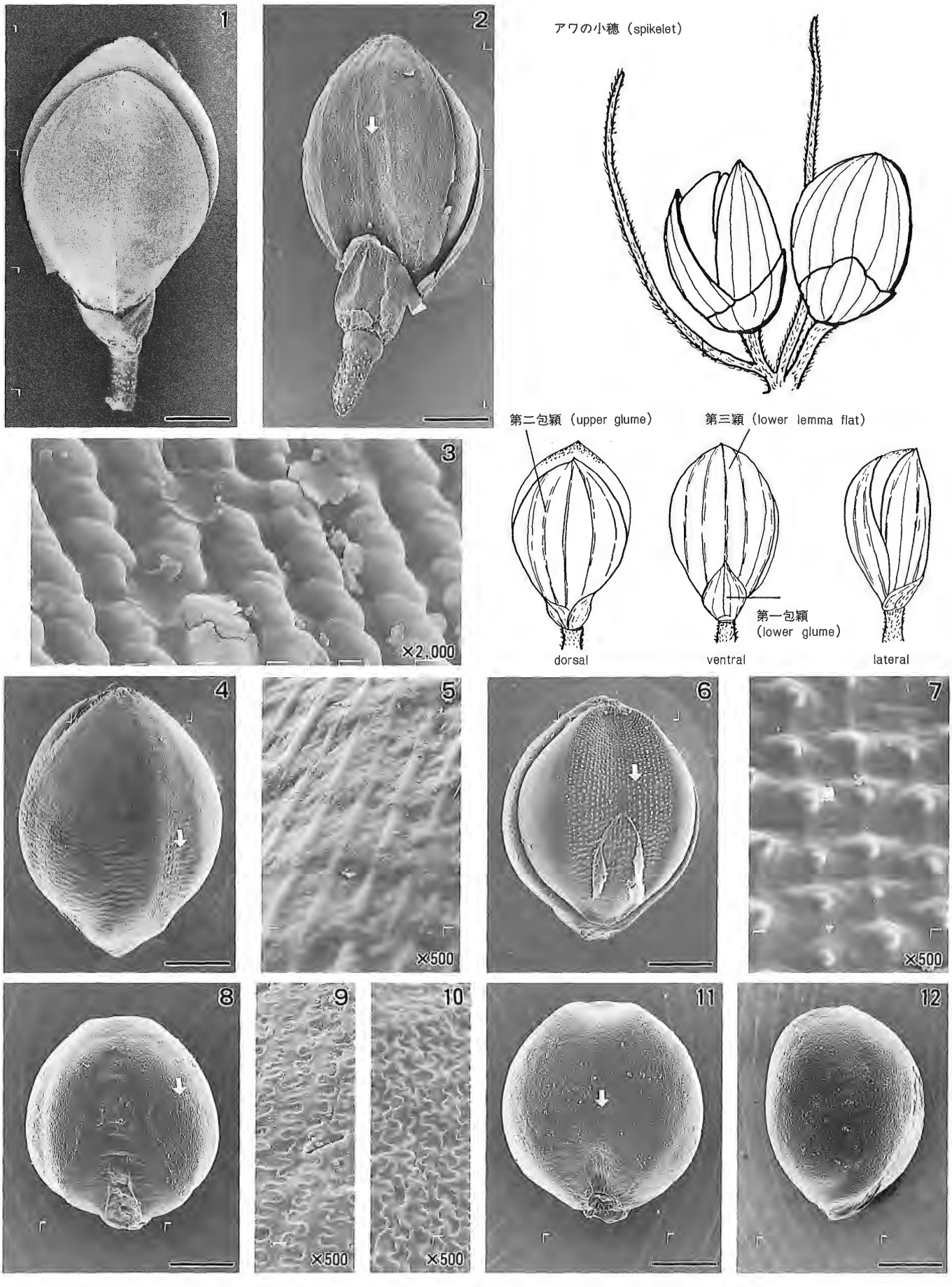




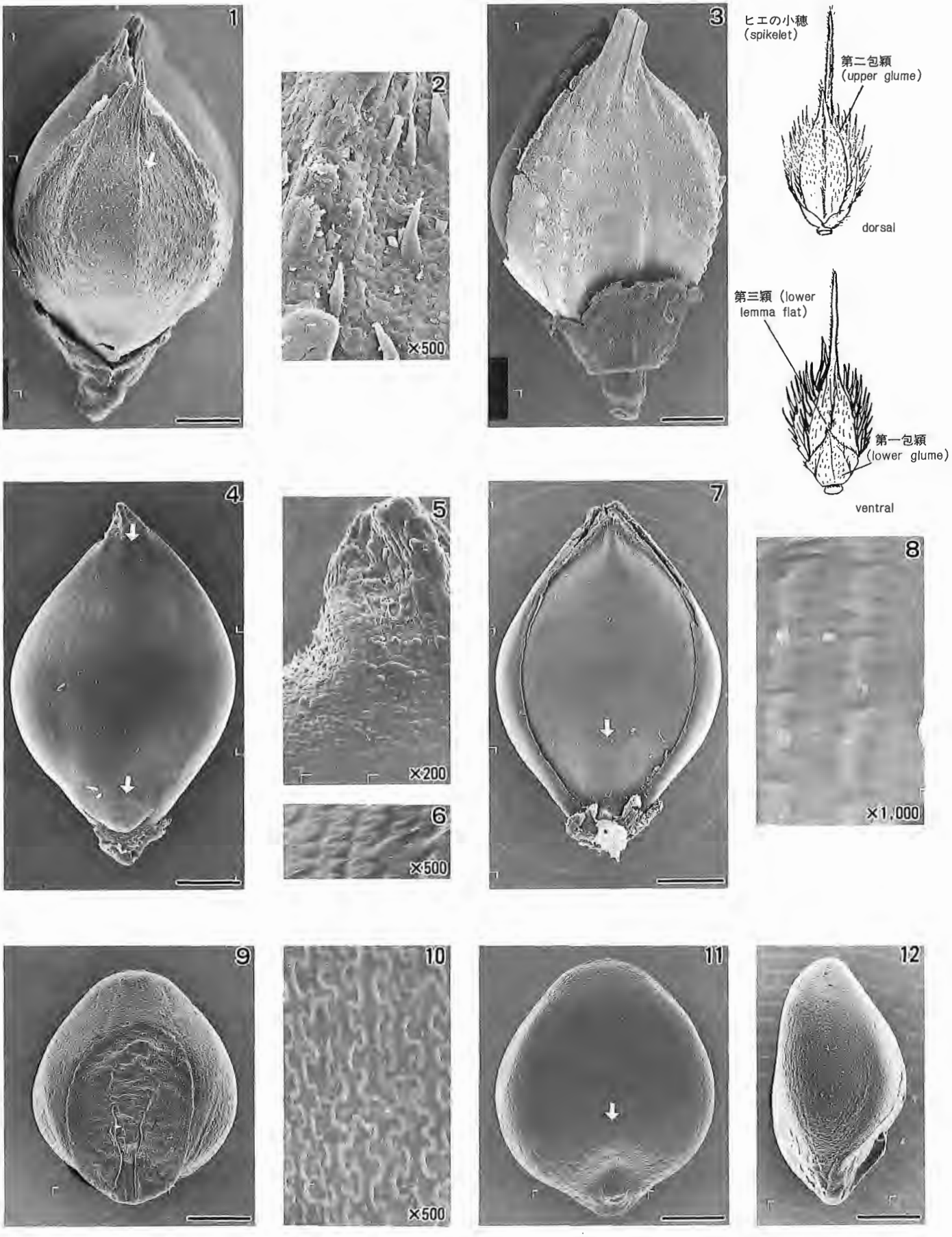
第32図　現生アワ・ヒエ・キビ・コムギの灰像と出土炭化物資料の走査電顕像



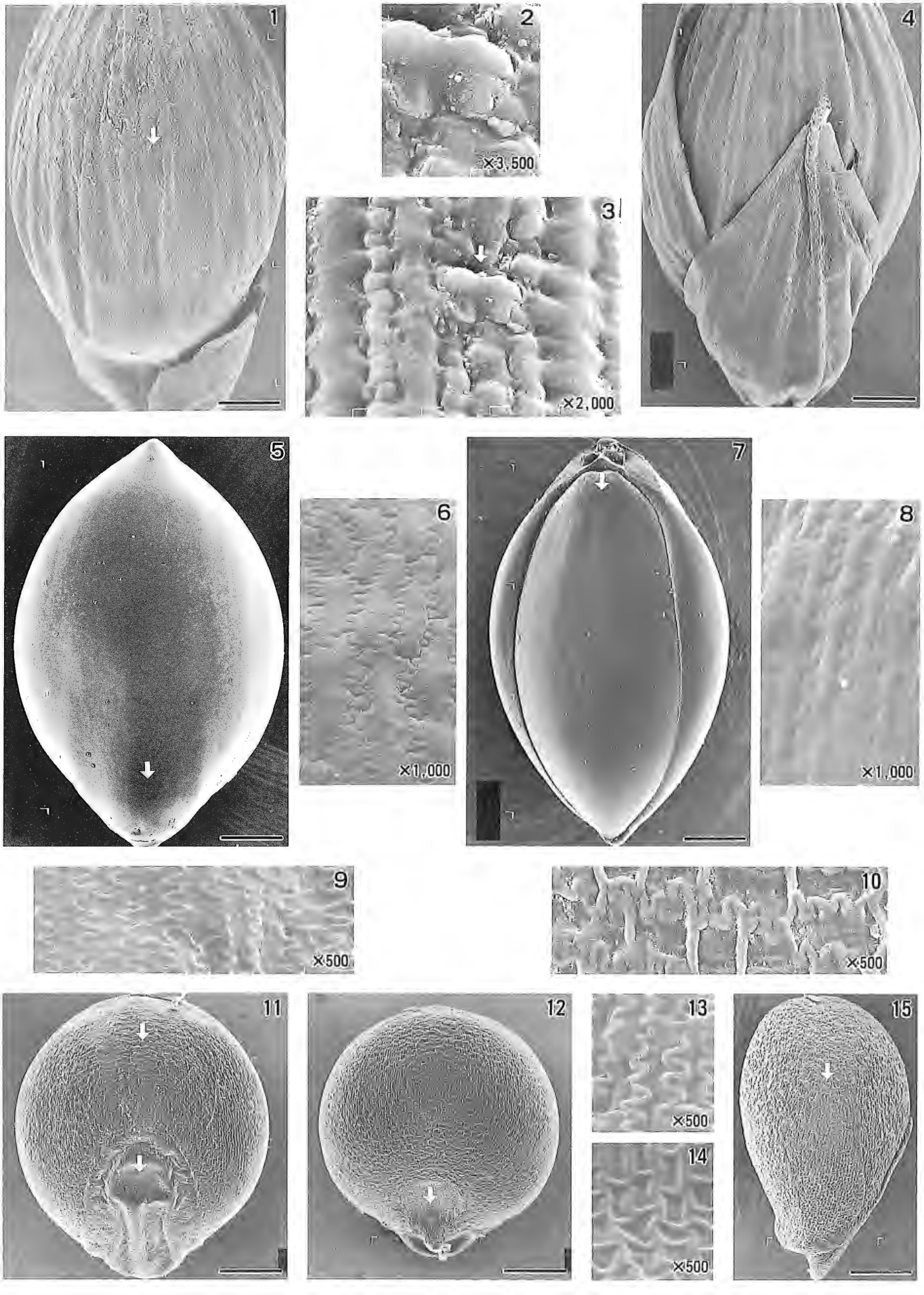
第33図　現生アワ（*Setaria itarica*）の走査電顕像



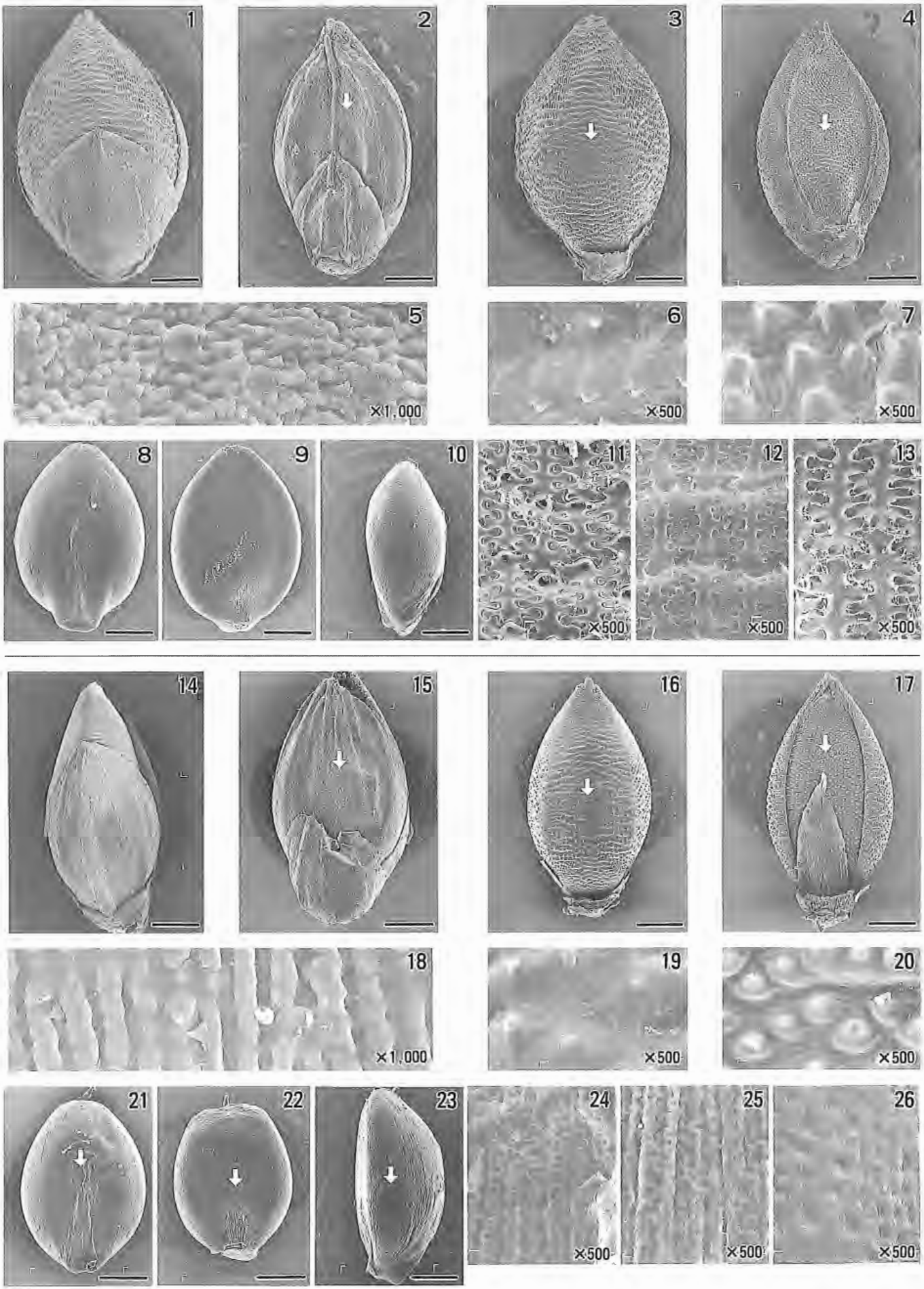
第34図　現生ヒエ（*Echinochloa utilis*）の走査電顕像



第35図　現生キビ（*Panicum miliaceum*）の走査電顕像



第36図　現生キンエノコロ（*Setaria glauca*）・エノコログサ（*Setaria viridis*）の走査電顕像



1．現生ホオズキ（*Physalis alkekengi*） 2．出土ホオズキ（サクシュコトニ川遺跡） 3，1の拡大 4．2の拡大 5．現生イヌホオズキ（*Solanum nigrum*） 6．出土イヌホオズキ（サクシュコトニ川遺跡） 7．5の拡大 8．6の拡大 9．現生イガホオズキ（*Physaliastrum japonicum*） 10，出土イガホオズキ（サクシュコトニ川遺跡） 11．9の拡大 12．10の拡大 13．出土アワ内頴（サクシュコトニ川遺跡） 14．「乳頭突起」13の拡大 15．「長細胞」13の拡大 16．出土アワ外頴（サクシュコトニ川遺跡） 17．16の拡大 18．「長細胞」17の拡大 19．「乳頭突起」16の拡大 20．現生キビの灰像 21．出土キビ（サクシュコトニ川遺跡） 22．現生キビのヘソ（Vantral） 23．出土キビのヘソ（Vantral）（サクシュコトニ川遺跡）

第31図
1．現生コムギ穂軸 2．出土穂軸（サクシュコトニ川遺跡） 3．出土穂軸（サクシュコトニ川遺跡） 4．「毛の部分」1の拡大 5．「毛の部分」2の拡大 6．「毛の部分」3の拡大 7．出土穂軸（サクシュコトニ川遺跡） 8．現生コムギの穂軸 9．出土穂軸（サクシュコトニ川遺跡） 10．7の拡大 11．8の拡大 12．現生コムギ穂軸 13．出土穂軸（サクシュコトニ川遺跡） 14．出土穂軸（サクシュコトニ川遺跡）

第32図
1．アワ包頴の「石英細胞」 2．ヒエ包頴の「石英細胞」 3．キビ包頴の「石英細胞」 4．アワ内頴の「長細胞」 5．アワ外頴の「長細胞」 6．アワ外頴端の「長細胞」 7．ヒエ内頴の「長細胞」 8．ヒエ外頴の「長細胞」 9．ヒエ外頴端の「長細胞」 10．キビ内頴の「長細胞」 11．キビ外頴の「長細胞」 12．キビ外頴端の「長細胞」 12．キビ外頴端の「長細胞」 13．出土資料（サクシュコトニ川遺跡）14の拡大（炭化物のまま観察） 14．出土資料（サクシュコトニ川遺跡）イネ科草本の一部とみられる．（炭化物のまま観察） 15．現生コムギ外頴 光顕 16．出土資料（サクシュコトニ川遺跡）光顕：炭化物を灰像にしたもの．オオムギかコムギ草本の一部とみられる． 17．出土資料（サクシュコトニ川遺跡）光顕：炭化物を灰像にしたもの．キビの「長細胞」とみられる．

第33図
1．包頴 2．包頴 3．「石英細胞」2の拡大 4．外頴 5，4の拡大 6．内頴 7．「乳頭突起」6の拡大 8．頴果（Dorsal） 9．「長細胞」8の拡大 10．「長細胞」11の拡大 11．頴果（Vantral） 12．頴果（Lateral）

第34図
1．包頴 2．「石英細胞」と「刺細胞」1の拡大 3．包頴 4外頴 5．「石英細胞」4の拡大 6．「長細胞」4の拡大 7．内頴 8．「長細胞」7の拡大 9．頴果（Dorsal） 10．「長細胞」11の拡大 11．頴果（Vantral） 12．頴果（Lateral）

第35図
1．包頴 2．「石英細胞」3の拡大 3．「石英細胞」1の拡大 4．包頴 5．外頴 6．「長細胞」5の拡大 7．内頴 8．「長細胞」7の拡大 9．「長細胞」11の拡大 10．「長細胞」15の拡大 11．頴果（Dorsal） 12．頴果（Vantral）13．「長細胞」11の拡大 14．「長細胞」12の拡大 15．頴果（Lateral）

第36図
1．キンエノコロ包頴 2．キンエノコロ包頴3．キンエノコロ外頴 4．キンエノコロ内頴 5．「石英細胞」2の拡大 6．「乳頭突起」3の拡大 7．「乳頭突起」4の拡大 8．キンエノコロ頴果（Dorsal） 9．キンエノコロ頴果（Vantral） 10．キンエノコロ頴果（Lateral）11．キンエノコロ内頴「長細胞」灰像 12．キンエノコロ外頴「長細胞」灰像 13．キンエノコロ内頴端「長細胞」灰像 14．エノコログサ包頴 15．エノコログサ包頴 16．エノコログサ外頴17．エノコログサ内頴 18．「石英細胞」15の拡大 19．「乳頭突頭」16の拡大 20．「乳頭突起」17の拡大 21．エノコログサ頴果（Dorsal） 22．エノコログサ頴果（Vantral） 23．エノコログサ頴果（Lateral） 24．「長細胞」21の拡大 25．「長細胞」22の拡大 26．「長細胞」23の拡大

各図版写真中のスケール（－）は0.5㎜

編集後記

今回は，1986年度に調査された続縄文期の一時的な宿営地の記録を中心に報告を作成した。不思議なことに，この時期の遺跡の発掘例道みるとほとんどが墓地に関連するものが多く，宿営地や集落はあまりない。したがってここにおくる報告は，札幌市教育委員会の調査したK135遺跡とともに，続縄文時代の好例としてあげられるだろう。

遺跡の発掘記録は横山英介氏が分担した。氏は遺物の接合関係を通じて遺構を詳細に分析し，それを利用して宿営地における人間活動の再構成についても述べている。これは氏が永年おこなってきた独自な遺物接合関係論の一つの到達点であろう。諸賢のご意見を待つ次第である。

土器の記載は，林謙作氏が分担した。縄文晩期の土器型式に詳しい氏が，紋様の分析に施文原体の再検討を加え，詳細に記載した。土器テクノロジー分析から導き出されたこの宿営地の土器型式論と，横山氏の遺物接合関係から再構成された宿営地の分析をみると，かなりの整合性が認められよう。今後，各地の遺跡で同様の研究展開が期待される分野といえるのではないか。

走査電子顕微鏡を利用した遺物の解析も始められた。担当の椿坂恭代氏による研究試料の一部を付篇として紹介しておく。遺跡から出土する炭化植物種子の考古学的な解釈は，まだはじめられたばかりであるが，各地から出土する植物遺存体分析に役立てばと思う。

本報告とは直接の関係はないが，北海道大学埋蔵文化調査室のプロジェクトに最初から関わっておられた文学部基礎文化論講座の岡田淳子氏が，本年度いっぱいで北大を去られ，新設の東海大学国際文化学科教授として転出されることななった。まことに残念であるが，新しい職場は専門教育一筋に御活躍できるポストであるとのこと，ますますの国際的御活躍をメンバー一同期待する次第である。また，調査室開設当時から事務局開係の厄介な調整を一手に引き受けられていた愛称〝調査室事務局長〟現農学部付属演習林事務長の宮下輝男氏が，今期限りで退職を迎えられる。氏なくしては今の調査室はありえなかったというのがプロジェクト一同の感慨である。今後ますます御壮健でお過ごし下さるよう祈念したい。

1988年3月　北海道大学埋蔵文化財調査室　吉崎昌一

北大構内の遺跡
6
昭和60-61年度

昭和63年 3 月30日発行

発行所　北海道大学
札幌市北区北 8 条西 5 丁目

編集者　吉崎昌一＋岡田淳子

デザイン　桜井雅章

印刷所　(株)北海道機関紙印刷所
札幌市北区北 6 条西 7 丁目



北大附近の赤外線カラー写真

北海道大学